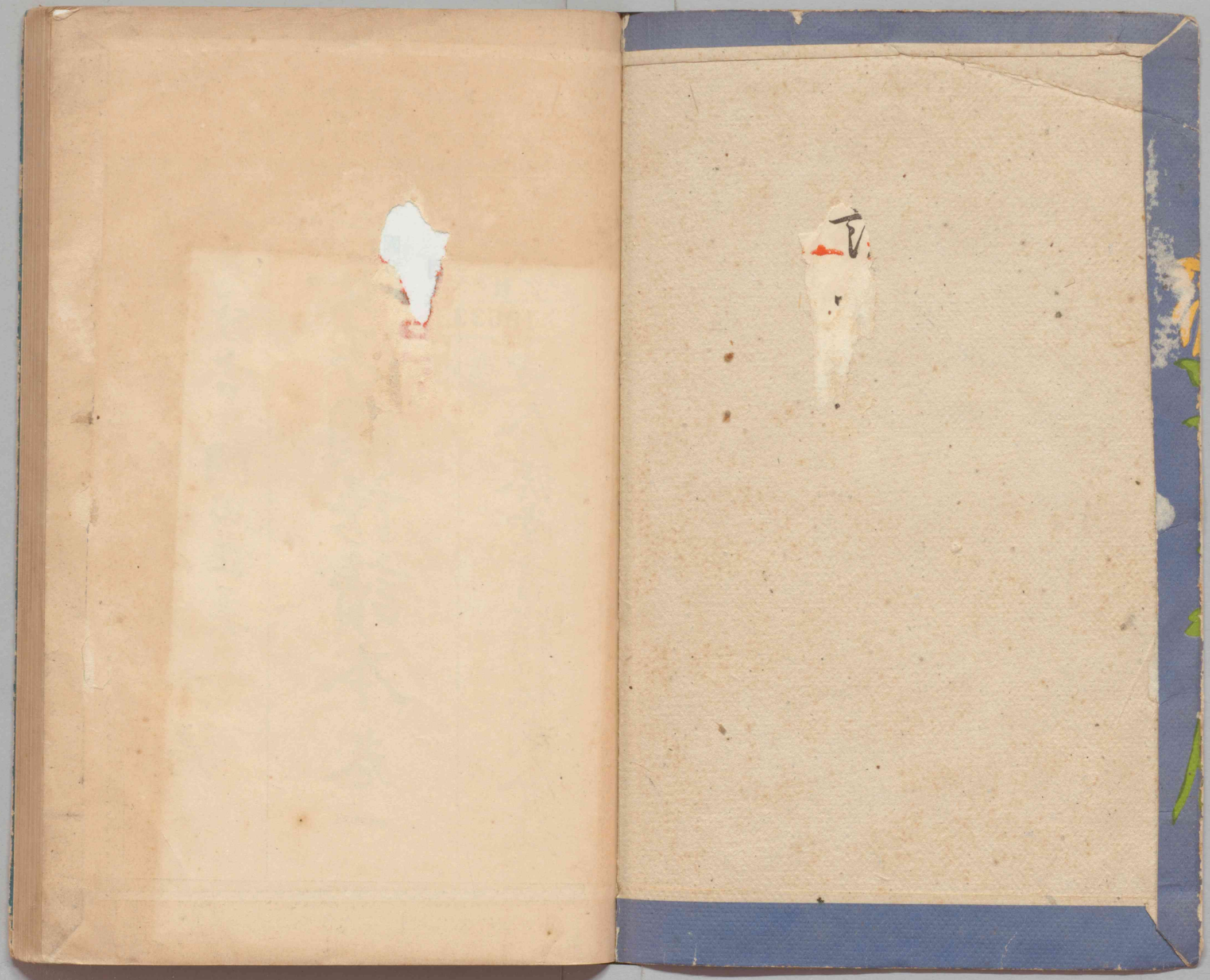
國語讀本 卷一

375.9
Yo19
資料室

42204
教科書文庫
4
810
42-1925
20003
01732



資料室
375.9
Y019

大正十四年二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

吉田彌平　篠田利英
小島政吉　岡田正美　共編

六訂 女子國語讀本 卷一

廣島大學圖書
教
19633
昭和二年一月廿日

金港堂書籍株式會社

目次

一　國花……芳賀矢一　一
二　春……大和田建樹　五
三　姉に……七
四　燕……尾上八郎　一〇
五　狗ころ……長谷川二葉亭　二
六　大原女……一三
七　深山の鳥……高濱虛子　一六

八　皇太子妃殿下……馬上孝太郎　三三
九　やさしの望……武島羽衣　三九
一〇　目標……四二
一一　奇蹟……林久男　四七
一二　人の運……大町桂月　五九
一三　飛行……岩本周平　六三
一四　雨……北原白秋　六九
一五　お祭……泉鏡花　七一
一六　住めば都……七八
一七　家庭日記……七九
一八　暑中見舞……八四

一九　働く料簡……和田萬吉　八五
二〇　震災記……加納作次郎　八八
二一　水の御馳走……島崎藤村　一〇三
二二　佐藤つる……井上毅　一一三
二三　蜻蛉……志賀直哉　一一八
二四　明治天皇の御遺物……笠井信一　一二二
二五　乃木大將夫人……一二九
二六　秋分……德富健次郎　一三五
二七　まことの愛……柳澤淇園　一三七
二八　海上日記……水上瀧太郎　一三八
二九　箱根路……正岡子規　一四一

三〇　山村……相馬御風　一四七

帝國大學圖書之印

六訂 女子國語讀本卷一

芳賀矢一*

*國文學者。文學博士。東京帝國大學名譽教授。國學院大學長

一　國花

我が日本の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であらう。支那にも櫻桃といふのがあるが、迚も日本の櫻の花には及ばない。西洋のチェリーも實は大きいが、花は面白くない。爛漫と咲亂れた櫻花の、山を埋め谷に滿ち、雲とまがひ雪と見えるのは、日本特有の美景である。

支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は美しいに相違ないが、あつさりとした日本趣味には適しない。香氣鼻を

衝く薔薇の色も棄てがたく美しいものであるが、これも艶冶の態があつて、清楚人を動かす趣に乏しい。しかし、歐米人は薔薇を花の王と稱するのである。

日本の櫻は、その色は極めてあつさりとして居る。但し、純白ではない、いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無數の花を着けて、咲く時は、一時に爛漫と殘りなく咲く。上品な大宮人の風もあり、野人の趣をも帶びて居る。深山・大都如何なる處にもよく調和する。二十日草の長い盛もなく、薔薇の高い香氣も無いが、いかにも見事である。

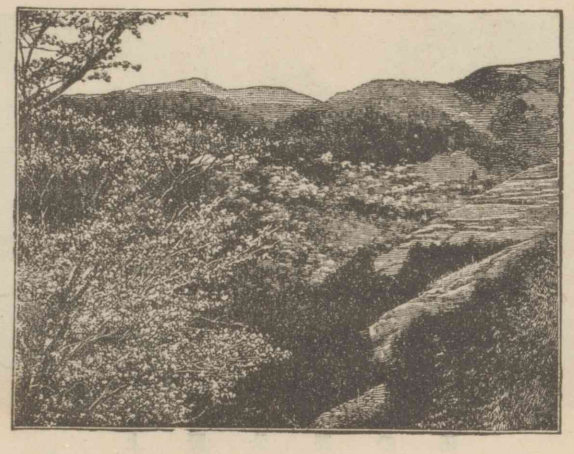
*空に知られぬ雪と散つて來る趣は、殆ど言語に絶してゐる。日本の花の中の花は實に櫻である。

*櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける。

櫻の咲くのは春である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない花曇の日、照りもせず曇りも果てぬ朧月夜は、霞か雲かとまがふ花には最もふさはしい。

吉野山

春の特色は、どこまでも、駘蕩といふ點にあり、溫和な所にあり峻嚴猛烈といふ心の微塵もない所にある。櫻はこの時候に育まれて咲出す花である。際立つた特色のない所が卽ちその特色である。「うらゝと、のどけき春の心より、匂ひ出



(一)照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。

(二)賀茂眞淵の歌。

(三)櫻はまくとうに春の氣分をよくあらはしてゐる

でたる山櫻花。」といふ歌などが、最もよくその特色をあらはしてゐる。

「吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり。」[一] 是は滿山櫻に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。「花の雲、鐘は上野か、淺草か。」[二] これは滿都花に掩はれた大江戸の光景である。櫻は牡丹や薔薇の樣な、花瓣を賞翫する花ではなくして、樹として賞翫する花である。否多くの樹を集めて、人は唯花の中に居て賞翫する花である。上から下を見て愛でる花ではなくして、下から眺めて愛でる花である。東風吹く春の三四月、日本人は暫し花の世界の人となるのである。（月雪花）

上野公園の花

(一) 八田知紀の歌。

(二) 松尾芭蕉の句。

國文學者、歌人。明治四十三年歿す。

二　春

朝の聲

大和田建樹*

鶯しきりに鳴くは、うしろの藪なるべし。起きいづる頃は、春の霜半ば消えて、日影はや庭にあり。ねごこちよき頃にもなれるかな。豆腐賣る聲は今ぞ門を過ぐる。（新文林）

茶店の晝

一もと柳の垂れたるかげに、床几ならべて團子を賣れり。

すゝぶりたる釜の下焚きつくるは主の老婆なり。腰かけて煙ふく客あり。日はまさに正午なるべし。雞一聲歌ひて、花は盆の上に散る。（藻鹽木）

村の夕

村また村の春の夕暮、櫻は大方過ぎて僅に遲き花を殘し、梨は到る處に盛にて、晴れたる日の雪のごとく、西日斜に照して花とも云はず松とも云はず、霞み渡れる景色の長閑けさ。菜の花の黄なると麥の綠なるとに包まれて、畫のやうに立てる藁屋のこゝかしこより、煙ほのかにたなびく。家の外に干したる布とり入るゝも見ゆ。流に鍬洗ふ賤の女は、田の中道を馬牽き歸る夫をや待つらん。（深山櫻）

三　姉に

皆さん御變りはございませんか。花子さんはもう這ひ這ひが御出來になりますでせうね。こちらは父上・母上はじめ、皆無事に暮して居ります。御安心下さいませ。

姉さん、私も高等女學校へ入學が出來ました。こゝしはいつもより志願者が多かつたといふので、どうかと案じて居りましたが、試驗がすんで掲示の中に私の名が出て居た時の嬉しさ。急いで内へ歸るや、挨拶もそこそこに御母樣に申上げました。その時の樣子とい

つたら、丸で鬼の首でも取つて來た樣だつたと兄さんは御笑になるのです。兄さんだつて、中學へ入學の出來た時は、隨分御喜になつたではございませんか。

學校は姉さんの時分より教室も增し、運動場も廣くなりました。運動の器械なども新しいのが出來ました。私どもは初の間こそ、それで面白さうに遊んで居る上級の方々を見てばかり居りましたが、この頃では、盛に運動をして元氣に遊んで居ります。

大抵時間毎に先生がおかはりになります。小學校とは大分勝手が違ふやうな氣が致します。姉さん、田中先生を御存じですか。昨日運動場でテニスをして居

りますと、先生が、「あなたの姉さんに春子さんといふ方があるでせう。」とおつしやつたには驚きました。

來週の土曜には遠足があるさうです。場處はまだ分りません。きつと作文の題になるだらうと、みんなが申して居ります。若しよく出來ましたら、御目に懸けませう。

内では毎朝學校の御辨當が四ついるので、御母樣もなかなか御忙しうございます。そのかはり夕飯の折は學校の話で持切です。御母樣よりも宜しくとの事でございます。さやうなら。

四　燕

尾上八郎*

都大路のあさがすみ
たなびきわたる青柳の
千本のみどりくゞりつゝ、
軒端に來るつばくらめ。

「初秋風にさそはれて、
み空の雲に消え入りし
去年の鳥よ。」と、われを見て、
語らふごとき姿かな。

*國文學者、歌人。文學博士。柴舟と號す。東京女子高等師範學校教授。

はてしもわかぬ大海の、
波の五百重のをちに居て、
もとの主人を忘れざる
心をいかにたゝへまし。

花ちり交るやちまたの、
薫れる泥を含みつゝ、
今年も軒に巣をかけて、
はぐくみ立てよ、汝が雛を。

五　狗ころ

長谷川二葉亭*

*名は辰之助、二葉亭四迷と號す。新聞記者。文學者。明治四十二年歿す。

ふと目をさますと、きやん〳〵といふ聲がする。耳をすまして聽いて居ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、消魂しくきやん〳〵と啼きたてる其の聲尻が、朧てかぼそく悲しげになつてめいるやうに遠い遠い處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼きだして、くん〳〵と鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠をするやうな時もある。

私は元來動物好で、わけても犬は大好だから、近處の犬は大抵知つてゐる。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寐られないのかえ。」

と母が寢反りを打つてこちらを向いた。私は此の返答は差措いて、

「あれは白ちやないねえ、阿母さん。もつと小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つて何。」

「棄狗つて。誰かゞ棄てゝいつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てゝいつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄てゝいつたと、私は二三度繰返して見たが分らない。

「どうして棄てゝいつたんだらう」

「うるさいよ。」などといふ母ではない、何處までも相手になり、其の意味を説明してくれて、「もう晩いから默つてお寐。」と優しく言つて、又彼方を向いてしまつた。　私も亦夜着を被つた。　狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の鼾が又耳に附く。

寐られぬ儘に、夜着の中で、今聽いた母の説明を繰返し繰返し味つて見た。　まづ何處かの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。　小さな、むく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げてみい〳〵と乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、そのそばへどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろ〳〵舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころころと轉がされる。　轉がされては大騒して起返り、又よちよちと這寄つて、ぽつちりと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く柔かな乳首を探り當て、あわてゝちうと吸附いて、小さな兩手で揉みたて〳〵吸出すと、甘い溫かな乳汁がどく〳〵と出て來て咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。　すると、腋の下から、まだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。　とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、到頭とられてしまひ、又其處らを尋

ねて他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で身體も溫まつて、融けさうな好い心持になり、ついうとうとゝなる、くゝんだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわてゝ又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又たわいなくうと〳〵となつて乳首が遂に口を脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の時忽ち暗闇から、もじや〳〵と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つて居る處をむずと引掴み、宙につるす。驚いて目をぱつちり明け、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔く中に頭から何かで包まれた樣で、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが出られない。しばらく藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と領元を撮まれて、高い〳〵處からどさりと落された。うろ〳〵としてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい、眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、怕しく寒くなる。身慄ひ一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よち〳〵這出し、雨の夜半を唯ひとり溫かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へか、さまよつて行つたやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處をどう潛り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さん〳〵、門の中へ這入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居たゝまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無さうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ。あら、あんなに啼いてゐる。」

とをりから絶入るやうに啼號ぶ狗の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん行つて見よう、よう。」

「本當に仕樣がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ〳〵、母も澁々起きて、雪洞を點けて起上つたから、私も其の後に隨いて、玄關、と云つてもつい次の間だが、玄關へ出た。

母が履脫へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がちら〳〵と靡く。其の時小さな鞠のやうな物が、つと軒下を飛退いたやうだつたが、軈て雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外にさし、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照し出した處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月も經たぬ、むく〳〵と太つた、赤ちやけたいぬころが、小指程の尻尾をちぎれさうに掉立てゝ、此方を見上げてゐる。なりは私が寢て居て想

像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を滴し、ぽつちりと兩の眼を、青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや〳〵、まあ、可愛らしい。」

と母もつい言つてしまつた。況や私は犬好だ。じつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

すると左程畏れた樣子もなく、ちよこ〳〵と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐい〳〵推上げるやうにして、べろ〳〵と舐廻し、手をくれるつもりなのか、頻に圓い前足を擧げて、ばた〳〵やつてゐたが、果はやんはりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて〳〵たまらない。母の面を見上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれど、居附いてしまふと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。

早速履脫へ入れて之を當がふと、小狗は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づぴちや〳〵と舐出したが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしん〳〵と小さな嚏をする。忽ち汁を

舐盡して今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟も無いのに、頻に小言を言ひながら、がつ〳〵と喫べ出したが、飯は未だ喰慣れぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなか〳〵取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、今晩一晩泊めて遣つてと、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もう、かうなつては仕方がない。阿父さんに叱られるけれどもと言ひながら、詰り棧俵法師を捜して來て、履脱の隅に敷いて遣つた。それは好かつたが、其の晩啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。(平凡)

六　大原女

「都の春の錦を織る賀茂の堤の柳の並木を、出町橋の袂で數へ盡し、比叡の山の裾を廻つて清く流れる高野川の響を、友としつゝ北へ三里行けば、八瀬へ出る。八瀬の北には大原の里がある。

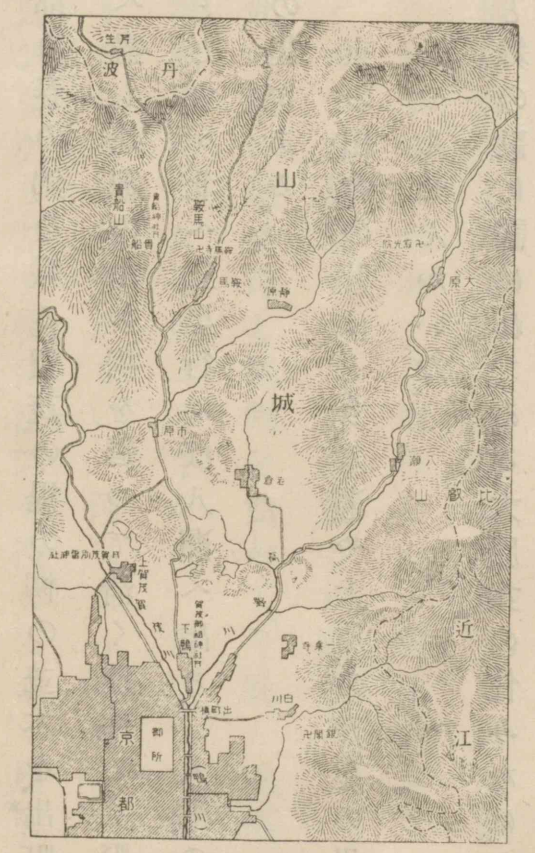
京の田舍の片ほとり、八瀬や大原の芹生の里。黑木買はしやんせんかいな。

と舞の歌に謠はれてゐる大原女の住みかは、この二つの村である。」

大原女の服裝は頗る詩趣に富んでゐる。黑木綿の着物に

*京都市の北、賀茂川と高野川との合する處にかかつてゐる橋。

御所染と稱する白黑だんだらの帶を締め、縫取模樣などのある三幅の黑い前垂をかけ、手には手甲をはめて甲から前腕を覆ひ、足には脚絆を穿ち、足袋をはいて、其の上に小さい甲掛を着ける。その甲掛は草鞋の紐で脚絆や足袋のすれるのを防ぐ爲だと云ふ。帶は一幅の布を五つ折にしたまゝで卷



京都附近地圖

附け、脚絆は皆前であはせる。これらは何れも木綿で拵へる。脚絆や手甲や甲掛は、白と黑と二通りある。白いのは京行きと云つて黑木を賣りに出る時、黑いのは山行きと云つて薪採や草刈などに行く時に用ひる。

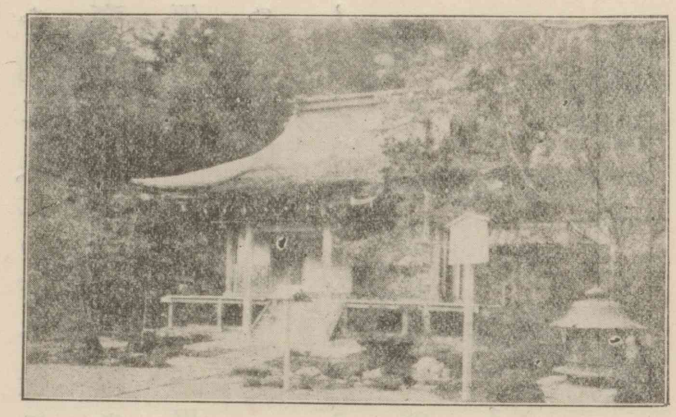
大原女

髪は投島田をぐつさりとつぶしたやうな結ひ方で、白地に山水の景色等を染めた手拭を風流に被り、こればかりを何よりの見えとして、縮緬やモスリンの丸ぐけの派手な襷をかけ、中には腰へ長い煙管を差して居

るものもある。

かうした大原女の珍しい風俗は建禮門院の侍女阿波内侍から始つたのだといふ。建禮門院　平相國の御息女、安德天皇の御母君で入らせられる。壽永の秋、平家の一門が壇の浦の藻屑と消えたとき、門院も安德天皇につゞいて御入水遊ばされたが、源氏方のものに救ひ上げられて京都へ御歸になり、尼となつて大原の寂光院へ入らせられ、天皇を始め奉り、平家一門の後世をお弔になつた。昨日にかはる片山里の佗住ひ、どんなに御痛はしい御有樣であつたらう。仕へまつる阿波内侍も山に登つては黑木を折り、谷に下つては水を汲み、まめ〳〵しく立働けば、膚は破れ、髪も亂れて

蓬の樣になる、其を恥ぢて門院の御前へ出る時に頭を着物の袖で包んだのが、後に傳はつて手拭を被る風となつたといふ言傳へになつてゐる。



寂光院本堂

大原女の物を運ぶ樣はまた一風變つたものである。何によらず頭の上へのせ、それを支へる爲に手拭を被つた上へ輪を載せる。輪は頭にのる程な大きさで、丁度釜敷の樣な恰好をしてゐる。山行きのは藁で作るが、京行きのは葦を用ひる。山から折つ

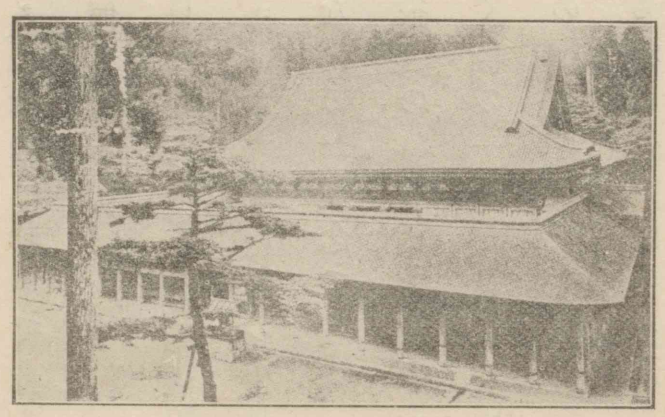
て來た黑木は軒端に積んで置いて乾かし、束ねた根元の方を前にし、先の方を後にして頭へ載せ、京へ出て大路・小路を賣歩く姿は誠に一幅の繪である。鐵漿つけた齒をもれる優しい賣聲、一日に一里を行き、十日に五里を行くと云つたやうな緩やかな足取。歴史の都、花の都の彩りの最も濃くしてふさはしいのはこの大原女である。香川景樹の歌に、

めせやめせ、夕げの爪木、めせやめせ。
かへるさ遠し、大原の里。（近畿國語讀本）

七　深山の鳥

高濱虛子

寢床を出て、齒楊子を使ひながら、湖水の見える部屋に行つて見る。朝日が部屋一面にさしこんで居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えない。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色である。部屋の下は、東谷になつて居るので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が、鉾の樣に突立つて居る。左手には北谷の向ふに當る峰が、鋸の齒の樣な杉を背に並べて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新

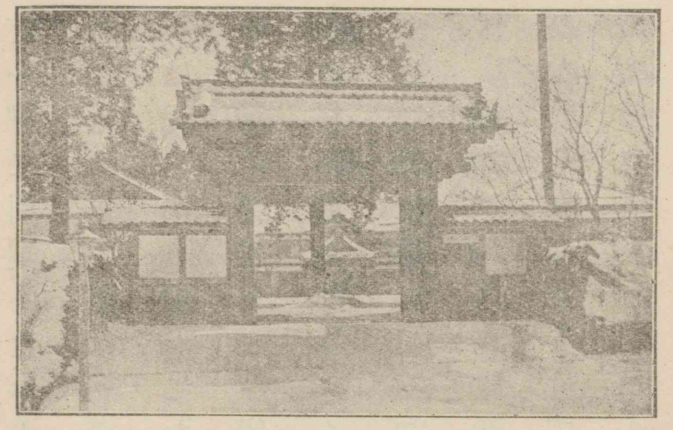


比叡山根本中堂

（一）名は濱。俳人、小說家。
（二）比叡山東塔の宿院に泊つたその翌朝。

鮮な色をして居る。さうしてその間を薄い霞が流れて居る。非常に靜かである。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えない。

只此の天地を我が物顔に啼いて居るのは小鳥である。何といふ可愛い聲の小鳥があるものであらう。名のわからないのが殘念である。そこの杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。遙か向ふの谷深く、他の一羽が應じて居る。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞える樣である。又その小鳥の合奏を破る樣に、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲では無いが、また凛々しい處があつて、その音の空山に響く趣が何ともいへない。羯鼓の上に金鈴を落したら、こんな音が出もしようか。それも一羽では無い。三羽四羽と聞くうちに段々殖えて來る。前の小鳥が縱絲なら、この小鳥は横絲の樣に、互に錯綜して、よく調和を保つ所が面白い。



比叡山東塔宿院

突然「けん〳〵〳〵。」と、けたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも、やゝ急調である。多分山鳥でゝ

もあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹を、だ一聲に引裂いたかと疑はれる。

暫くしてその聲は、谷の底、峰の奥に浸込んでしまつて、その後は元の通り靜かになる。眞先にその靜けさを破つたものは鶯の聲である。絹に置かれる絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、また縱絲を織つて前の小鳥が啼く。また横絲を織つて次の小鳥が啼く。絣が啼く。縱絲が啼く。横絲が啼く。この絹をまた、山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待ちまうけて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐる、谷の神社の鰐口が、口をあけてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の聲々がみな高調で晴々とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらう。」といつた。二人の和尚は「山鳩だらう。」といつた。

琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂つて居る。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで來て、だん〳〵と谷が深く見えて來る。」（新寫生文）

八　皇太子妃殿下

馬上孝太郎*

皇太子妃殿下の御淑德に就いては、世間に洩れ聞えて居ることも尠くはないが、學習院女學部御在學當時、私が直接見聞し奉つたことを聊か申し述べて見たいと思ふ。

*教育家。前學習院女學部教授。東京高等師範學校教授。

殿下は學業極めて優秀でいらせられた。殿下の御同級には優良な方が多く、男子ならば多士濟々とでも謂ふのであらう。其の間に立たせられて、殿下は常に拔群の御成績を贏ち得られるのであつた。學科によつて得手不得手、又は好き嫌ひなどといふことがなく、何れの學科も皆一樣に勉强せられた。一體上流家庭の子女は、學科に對して出來不出來があり、又好き嫌ひも多いのが常で、それが爲普通教育の成果は中々收め得られないのである。然るに、殿下は少しも此の風なく、「學生としては能く教官の指導に從ひ、どの學科でも一樣に勉强するのが本務である。」といふ御覺悟に見えた。隨つて御成績の惡からう筈はないのである。裁縫とか體操とか圖畫・習字などといふ學科は、動もすれば一般學生の好き嫌ひをする學科であるが、殿下は萬遍なく御出精遊ばすので、此等受持の教官は、何れも「良宮樣は能く御勉强遊ばす。」と互に喜び合つたものである。

皇太子妃殿下

殿下の御勉强は所謂月並の勉强ではない。只諳誦や記憶のみで滿足せられる御勉强ではない。十分會得するまでは決して已められぬといふ御態度である。其の庶物觀察の如き、正鵠を得なければ已まぬといふ風で、そして之を發表せられる段になると、簡

明直截、而も理路井然。容易に他學生の企及する所ではなかつた。

試驗の時に最も後れて紙に臨まれ、而も最も先んじて答案を差出されるが例となつてゐた。優秀な御成績といへば、「宮樣だから。」などと思ふものがあるかも知れぬが、學習院には、人により族籍によつて採點を二三にするなどのことは夢にも無かつたのである。

御德行についても、殿下は各種德目の、渾然と圓熟せる御持主でいらせられると申上げるが最も適當なのである。殿下は容易に善惡是非の批評を口にせられず、又御擧動にも露されない。常に莞爾として微笑を湛へさせられ、いつも

渝らせ給ふことがないのである。御在學中殿下の御叱りを蒙つた人は、勿論一人もあるまい。殿下は年上の人に善く、又年下のものに善く、勿論同級生に善く、殊に下々のものに對しては、最も善く遊ばされたと思ふ。であるから、殿下の御出での處には、必ず學生が群をなしたものである。蓋し一度殿下に近づき奉つたものは、殿下から離れ難くなる爲と思ふ。さりとて又狃れ奉ることも出來ない。殿下の周圍には春風が常に吹き通つて居ると同時に何處となく秋霜の威が有り、謂はゆる威あつて猛からずとも申すべきか。實に殿下は、始から萬民の上に立たせられる御器量を御具へになつて御生れ遊ばしたかのやうに拜せられるの

である。

殿下は何事も御心から御愉快氣に遊ばした。御身輕に御氣輕に遊ばされた。運動などの時の御元氣は非常なもので、その高潮に達せられると、御頰のあたりに少し紅を潮せられ、しかもけ高い御姿で懸命に遊ばされた。其のころは女子の運動遊戯が將に校内に盛にならうとした時で、體操の動作などには、女學生に中々容易でない部分もあつたが、殿下は率先努力せられて之を遊ばすので、同級生には可なりの運動家が出來た。殿下の御體格も次第に良好の御成績を顯されて、殿下御自身大層お喜び遊ばされたことを拜見したことがある。最初は、御身長も同級生の平均よりは

ずつと低くいらせられたが、御退學の前年、大正六年頃より著しく御發育になり、其の後、御殿内の御生活が理想的に進まれたので、今日では、御身長も普通以上、寧ろ婦人としては高い方におなり遊ばしたといふことである。

今や殿下にはめでたく御結婚の御儀もお濟まし遊ばされ、東宮御所内に御起居遊ばすことになり、坤德いや高き皇后陛下の御指導によつて、殿下の將來は一層輝きわたられることになるであらう。皇國の爲、皇室の爲、殿下の爲に、寔に喜ばしい極みである。

「九」　やさしの望

武*島羽衣

*名は又次郎。國文學者、歌人。文學士。

ゆふべの空を眺むれば、
浮きて漂ふむら雲を
嶺の嵐にはらはせて、
輝き出づる望の月。
心のまゝになるならば、
取りて飾りて、わが母の
朝の鏡にまゐらせん。

あしたの野邊を眺むれば、
小草・若草・百千草
たゞ一つらに生ひ立ちて、

寝よげに見ゆる青錦。
心のまゝになるならば、
閨にうつして、わが父の
夜のしとねにまゐらせん。

門の小川を眺むれば、
小さくやさしき音たてゝ、
流るゝ水のその上に
散りてうかべる星の玉。
心のまゝになるならば、
取りてつらねて、わが姉の

髪の飾にまゐらせん。

遠きかなたを眺むれば、
赤・青・紫とりまぜて
色美しく染めなされ、
高くかゝれる虹の綾。
心のまゝになるならば、
取りて仕立てゝ、わが妹の
はれぎの帶に與へてん。（國語讀本）

一〇　目標

一九一四年十一月二十六日から二十七日の朝にかけて、今までフランス*附近に陣を布いて居た獨逸重砲兵の一隊は、何處へか其の姿を隱してしまつた。佛軍は盛に飛行機を縱つてみたが、容易に發見することが出來なかつた。いろいろと研究した末、小丘上にある一農家に偵察兵を派して、敵軍を搜索しようと決したが、此の任務に就く者は、萬死の覺悟をしなければならなかつた。遂に幾人か志願して出た決死の勇士の中から、二名の曹長を派遣する事となつた。二人の曹長は林間を這ひ或は敵彈に身を暴して千辛萬苦の末、遂に無事に目的の農家に忍び込む事が出來た。それから、數分時經つてから、曹長は電話にかゝつた。

*フランスの東北、白耳義の國境に近い市街。

「もし〳〵、えゝ、電線を無事に引込みました。はい、二人は今納屋の中に隱れて居ります。獨兵は目前に居るのであります。此の農家の北、千五百米、地圖上に示してある山林を目標に照準して下さい。」

味方の巨砲は轟然と轟いた。

「隊長殿、前面に落下。照準は猶百米前方。少し右方に過ぐ。左方照準。然り。其の邊。命中。命中。的確です。」

殷々轟々、我が軍の打出す砲彈に、敵兵は算を亂して僵れた。

「もし〳〵、敵は非常に混亂して居ります。はい、私どもは、納屋の中に隱れて居るので、至極安全です。此の家の納屋の明り窓は、敵軍の方に開いて居りますから、偵察には非常に便利であります。

十分許の間に、我が軍は敵の砲兵を殆ど擊碎してしまつた。

すると、けたゝましく電話がかゝつて來た。

「隊長殿、砲擊中止。敵は山林から退却を開始し、今我が農家の方向に向つて移動して居ります。え、農家、私どもが居る此の家の方へであります。撤退。撤退せよといはれるのでありますか。併し、若し私どもが退却してしまつたら、今後の報告はどうしませう。はい、いや、今しばらく止つて形勢を見たいと思ひます。納屋の中に居りますから敵兵に發見される事はありませぬ。敵は此處から三十米の處に砲列を布いて居ります。えゝ、出發、撤退す

るのですか。あゝ、もう遲くあります。獨兵は庭の中へ這入つて來ました。なに構ひません。敵は全部用意を整へて陣を布きました。隊長殿。今であります。砲擊開始。目標は此の農家。いえ、私どもを目標にして砲擊して下さい。一分の猶豫もなりませぬ。早く。目標は農家であります。

嗚呼、勇敢な兵士。隊長の身として斯樣な忠勇な部下をどうして己れの砲彈で殺すことが出來よう。併し二人の兵士は殺しても國家をば救はねばならぬ。好し。二人の讐は打つて遣るといふや否や號令一下。忽ち農家の礎も敵軍の砲車も、激烈な佛軍の彈丸に碎け散つて、さしもの敵を見事に全滅させてしまつた。嗚呼、勇敢な兵士。其の電話の聲は今なほ戰友の耳に殘つて居るけれども、其の姿も、其の農家も、最早影を止めぬやうになつてしまつた。

（時局に關する教育資料）

二　奇蹟

林*　久男

晝食から歸つて來たT教授のせつこんだ話、それは宅の長男が二階の窓から往來の敷石の上へ落ちたとのこと。そこで或一種の覺悟を極めて、急いで歸宅した。

門を入ると、先づ其の窓を見上げて、其の高さに今更ながら驚いた。下に敷きつめた白川石の廣く堅いのにも戰いた。

*獨文學者。第三高等學校教授。

其のほの白い石の上に生々しい血の痕でも見たら、きつと其のまゝぐら〳〵と倒れたことであらうが、其の惧れたものは何處にも見られなかつた。

靜かに戸を開けて這入つて室へ通ると、白いものを掛けた小さい床のそばに、妻はじつと檢溫器を見つめて居たが、急に居ずまひを直して默つて頭を下げた。自分は默つて禮を返して、默つて幼兒の額に手をあてた。頭部から顏半面へ掛けて繃帶をしてゐる。

「本當にとんだ事が起りました。申譯ございません。」と妻は俯向いて咽ぶやうに云つた。

思ひなしか、急に窶れが見えるやうにも思はれた。

「熱は？」

「案じた程でもございません。先程からうと〳〵し初めました。」

小さい生命はかすかに息を通はして、すや〳〵と睡りに入つて居る。嚙みきつた唇は散つた薔薇の花のやうに紅く血がにじんでゐる。鼻の頭と眦にも擦傷が痛ましく見える。二人は默つて其の繃帶の上を見詰めてゐた。冷たい窟か何ぞのやうに、言ひやうのない靜けさと淋しさとが室の中を支配してゐた。小さい屍が横たはつてゐるやうに見える。

「醫者は何と云つて？」

「今晩熱が出ると危險だとおつしやいました。内出血は無ささうでございます。」

「もう微塵粉になつてゐることゝ思つてゐた。併しかはいさうなことをした。どうしても助けたい。これが死んで行くなんといふことは考へられない、堪へられない。」と寄りすがるやうに、更に子供の額に手を當てたり、脈を見たり、指先を火のやうにして、胸のあたりから足の方へそろ〳〵と手をやつて見た。小さい柔かい體は、どこも傷はれずに溫かくそこに横たはつてゐる。思はず胸ををどらしながら、靜かに撫でまはした。

「それにしても、どうして落ちたんだね。あの石の上へ？」

「えゝ。」

「あの窓から？」

「えゝ。私が悪かつたのでございます！」と妻は急に咽びないた。

「いや、誰がわるいもない。自分の子を落さうと思ふ人があるものか。怪我だから仕方がない。私はお前の心を察してゐる。」

實際妻は此の事件をどうして報告していゝか、死ぬやうに心を碎いてゐたらしい。それでも子供の眼前の容體に幾らか元氣を得て、靜かに語り出した。

晝少し前に妻の親友が二人、子供を二人づつ連れて遊びに

來た。始は下の客間に話してゐたが、折柄飛行機の低空飛行の曲藝があるといふので、其のうなり音を聞いて、子供等は爭つて二階の西洋間へ駈けあがつた。それで妻も夫人達も話をやめて、跡を追つて二階へ上つた。常には開けない窓を開けて其の前に椅子を並べてそれを押へてゐてやると、子供等はそれに坐つて、空に舞ひ狂ふ怪物を見ながら、小さい手を打つて喜んだ。女の子どもはお嫁さんごつこをしたいといひ出したので、中央の大きな卓子が邪魔になつた。妻はそれを片附けようとしたが、ふと氣付いて、子供等の前の開いた窓をそつと締めて下のねぢ釘だけを一寸挿した。そして向きかへつて一人の夫人と共に卓子へ手を掛けた其の刹那、締めたと思つた窓が開いて、あつと云ふ間もなく、一人の子供の姿は、忽ち見えなくなつてしまつた。妻は狂氣のやうに階段を飛下りて裸足でそとへ駈出た。見れば子供は二人の土工らしい男に搔抱かれてぐつたりとして居る。此の男らは折柄庭前に仕事をしてゐたのであるが、駈けつけて、あはや四つの手に受けとめようとする瞬間に、石の上へ落ちてしまつたのである。早速家へ抱き入れて醫者を呼んだが、醫者はもう到底救ふべからざるものと思つて來たらしかつた。併し傷は前額と口邊に、かすり傷を受けただけで、其の外には何の異常も無いので、醫者は唯不思議だ〳〵と繰返してゐたといふことである。

「奥さんがたは、もう泣いてばかりいらつしやいました。」

「内出血が無ければいゝが。」

「えゝ、今晩が瀬戸際でございます。熱が出ると、其の儘いけなくなつてしまふさうです。私のねぢ釘の挿し方が悪るかつたんです。みんな私の不注意からです。」

と妻は更に涙ぐんだ。

その夜は二人とも一睡もしなかつた。繃帯に半ば隠れた顔を見詰めながら、熱を測つたり脈を見たり、どうしても助けたいといふ一念に燃えたつた。夜が更けるにつけて、子供の寝息を聴きながら、二人がじつとそれを見入つて居た時には、本當に其の小さい魂が自分等の何物にも代へ難い大事のものであるといふことが、しみ〴〵と思はれた。併し時を刻む時計の針の音と共に、刻一刻その小さい命は薄れて消えてゆくのではあるまいかと思ふと、もう居ても起つてもゐられないやうないやな、何とも言へない淋しい感じに襲はれた。

併し案じ煩つた熱のあらはれないのを見ては、幾度も検温器を取換へて見た。幾度も脈を探つて見た。其の微かな變化をも無限の執着を以て見逃すまいとした。

「變ですわねえ。」

「どうもをかしい。まるで平熱だ。」

「氷嚢は三つも用意して置きましたのに。」

「もう大分遲いねえ。」

「ちきに夜が明けませう。」

「何だか、私は非常に嬉しくなつて來た。」

「このまゝ助かるんでせうか。」

「大丈夫助かる。私は信ずる。どうしても助けなければならない。」

「えゝ此の子が死ぬなんて……」と妻は、又おろ〳〵聲になつたが、

「もうあなたお休になつては。樣子が變つたらお起し申しますから。」

疲れたせゐか、ついぐつすり寢こんでしまつたが、やがて夢

の中から妻の呼び聲が聞える。

「あなた、あなた、ちよつと御目覺めになりませんか。」

段々それがはつきりと耳に入つて來て、ふと目をさますと、實際妻が其處に居る、何時しかもう日が射して居る。

「どうした！坊は？」

妻は何とも言へない晴れやかな顏をして默つて自分を起した。そして別室の硝子窓の處へ行つて下の庭を指ざした。そこには頭に繃帶をして赤いジヤケツを着た子が、三輪車に乘つて駈けまはつてゐた。私は自分の眼を疑つた。

「どうしたんだ。」

「今朝目が覺めると、どう止めても聽かないんですよ。一

度言ひ出したら引きませんから。」

といかにも其の不從順を嬉しさうにほゝゑんだ。私は矢庭に階段を駈けおりて、庭へ出るなり、我が子のからだを、じつと後ろから抱きしめた。その途端に思はず熱い涙がほろほろと落ちた。

「奇蹟だ。……神意だ。」と心から人間の力の弱きを感じた。

「坊や、昨日どこから落ちたの。」

「あちこ、〳〵」と小さい指をあげた。

「坊や、こはかつたの。」

「ううん、ぶーんてなつたの。飛行機のやうになつたの。」

「ふうん、飛行機のやうだつたの？。お手々はどうしたの。」

「お手々ね、かうしたの。」と小さい手を二つ並べて前に衝く形をした。私は今更ながら其の窓の高さを仰いで、

「奇蹟だ。……神意だ。」と恰も天授の賜のやうに、我が子の溫かいからだを抱きあげた。

硝子窓のかげには、妻がじつと顔をおさへてゐた。

（藝術より生活へ）

一二　人の運

大町桂月*

運は傍觀する人を去つて、奮鬪する人に來る。世には碁を打つて、負くれば腹が立つとて、自らは碁を打たずして、唯見物してこれを樂しむ者あり　岡目八目、その手は惡し、あそ

*名は芳衛、文章家、文學士。

こはあゝ打つべし。」などと、口ばかりは上手なれど、力量は一向になし。これにては十年傍觀しても、二十年傍觀しても、碁に上達すべくもあらず。碁の如き遊戯はそれにても可なれども、人生にも往々傍觀的態度を取るもの多し。實行の如何を考へずして、唯大言壯語し、人の爲したる事を非難し、高慢なる事、生意氣なる事を言ひて、以て自ら衒ひ、賢げなる事を言ひて以て自ら高しとするがごとき人には、運は向いて來ざるべし。失敗は成功の基なり。好運を得んと思ふ者は、自ら渦中に投じて奮鬪せざるべからず。高みの見物は不可なり。彌次馬となつてわい〳〵騒ぐとも、何の得る所あらんや。

(一)名は安芳。政治家、伯爵。明治二十三年歿す。

(二)東京市四谷區。

(一)勝海舟、壯時西洋式の兵學を學びけるが、一書肆の店頭に、當時得難き舶載の兵書あるを發見せり。價五十兩なりと云ふ。海舟之を購はんと欲すれども、家貧にして直ちに五十兩の金を辨ずる能はず。十數日間苦心慘澹の結果、漸く之を調へ得たれば急ぎ書肆に行きて購はんとすれば、既に他人に購はれし後なり。

勝海舟

海舟遺憾に堪へず。其の人を問へば、(二)四谷大番町に住める與力某なり。」といふ。乃ち其の家にいたり、情を陳じて讓與せられたしと乞ひしに、與力聽かず。借覽を乞ひしに亦聽

かず。海舟曰く、「晝間は足下に必要あらん。されど夜間寢に就かれたる後は、我に貸しても可ならずや。」と。與力止むを得ずして曰く、「四*つ時を過ぐれば貸しても可なり。されど、戸外に持出すことを許さず。」と。海舟辛うじて茲に一點の光明を認めたり。翌夜より其の家に赴く。當時海舟は本所錦絲堀に住めり。四谷大番町を距ること一里半もあり。然るに、海舟は風雨と雖も休まず、又一夜も其の刻を誤らず。斯くのごときこと半歲餘、終に八卷の兵書を悉く手寫することを得たり。與力に向つて其の厚意を謝し、且寫本を出して、二三不審の點を擧げてこれを質す。與力感歎して曰く、「僕謄寫の勞無くして未だ全部を通讀するに至らず。實に慚愧に堪へず。請ふ此の書を足下に呈せん。」と。海舟固辭すれども聽かざれば、終に之を受けたり。與力は運を傍觀せるなり、海舟は奮鬪して運を拾へるなり。（人の運）

*今の午後十時頃。

一三　飛行

岩*本　周平

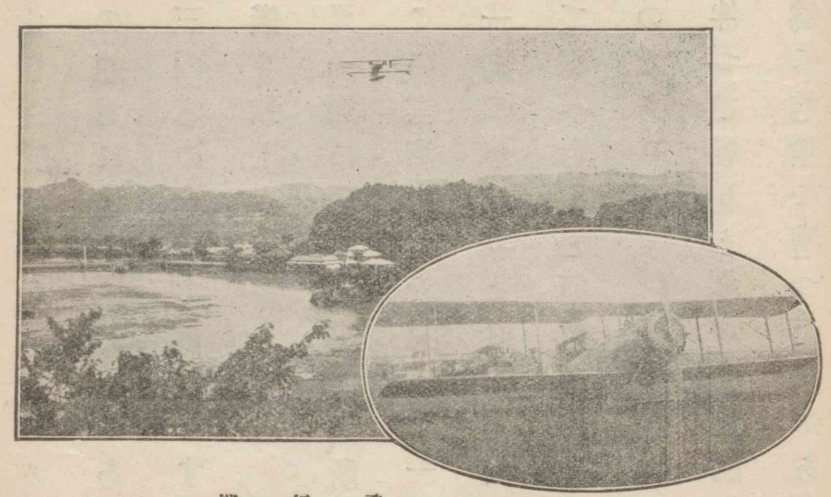
*陸軍航空部附陸軍技師。理學士。

始めて飛行機に乘つた時は、何時の間に地面を離れたのやら、今どの邊に居るのやら、全くわからず、無我夢中でありました。高い屋根、高い樹へ登つた時の樣な心持は少しも致しませぬ、只やかましい發動機の音が聞え、風が烈しく顏に當るだけのことでありました。はじめのうちは教官が座席に乘つて操縱するのを、後部に乘つて見て居るだけのもので

す。

次第に慣れて來ると、練習生が座席に乘つて操縱し、教官は後に乘つて介添の役をします。更に進むと教官はたゞ同乘して視て居るだけであります。夫から單獨飛行をし、空中滑走をし、發動機を止めて着陸する稽古をし、最後に野外飛行をして、それで卒業するのであります。

飛行すると、空中で色々な現象に逢ひます。突風に逢ひますと、機は恰も小舟が波にゆられるやうに、下からどんと突揚げられて、次にすうと下り、再びどんと突揚げられて復すうと下るといふ樣な工合で、尻が座席からはね上げられる事があります。山を越える時には、殊に烈しい突風にあひ



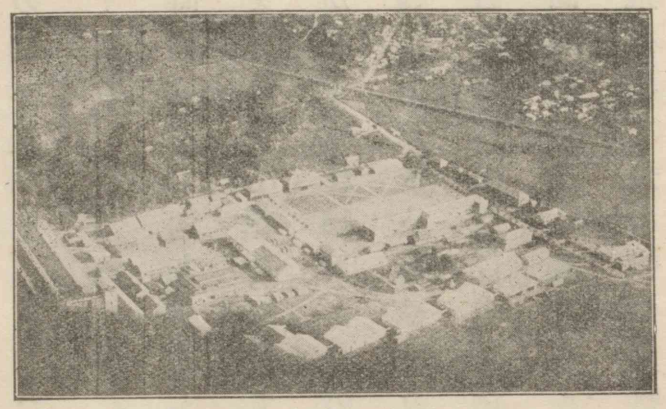
飛行機

ます。風が山の向ふから吹いて來る時には、風は山に沿うて登り、絶頂を越えると、又山に沿うて下るものです。今飛行機が山を越えようとして風に逆つて進みますと、機は吹下す風の爲に、如何に上げ舵をとつても上りませぬ。さて山を越えて反對の側へ行くと、今度は風が吹揚げるので、下げ舵を取つても容易に下りませぬ。富士

山の近處はこの吹上げる風、吹下す風が烈しく、一秒十米程の速力に達することがあります。今日の飛行機は一秒に三四米の速力でありますから、この風に逢ひますと甚だ難儀を致します。」

又、一面に平らな雲の上、所謂雲海に出ることがあります。この雲海で下を見ると、一面漠々、今何處を飛んで居るのか一向にわかりませぬ。山の上か、海の上か、この雲を突抜けて下へ行くと何處へ出るか、少しもわからず、實に心細いものであります。殊にかの所謂入道雲には常に強い突風が伴つて居ります。大正四年八月十八日に、私の友人が雲の爲に危險に遭つた事がありました。朝の八時頃曇天で風

も穏か、處々に小さな入道雲が浮んで居りましたが、飛行には好い日和でした。友人は高度八百米の處を飛行して參りましたが、眼前に小さな雲が出て居ります。平生の通りすぐ通り抜けられる積りで、其の雲の中へ這入りましたが、豫期と違つて、一寸の間には通り抜けられませぬ。前後左右一面に眞白な中を進んで參りますと、機は兎角下向になる



所澤飛行場

様な氣がしたので、ハンドルを握つて頻に上昇しようと力

めました。幾度も之を繰返してゐる中に、ふと横の方に雲の切れ目が見えましたので、見ると鐵道線路が垂直に立つてゐる。「はつ、機は横になつて居るな」と氣が附いた。其の時、雲は忽ち四方を蔽うた。相變らず舵を下げられる。力をきはめて頻に抵抗する。暫くすると前面に雲の切れ目があらはれ、畑が自分の正面に直立して見えた。「やあ眞逆様だ。」知るや否や、力のかぎり上げ舵を引いた。ぷつんと針金の切れた音がした。萬事休す、「墜落」といふ考が閃いた。同時に今日は八月十八日だといふ考が浮んだ。由來所澤飛行場で、飛行機の災難の起る日は、いつも八の日であります。それで、此の刹那に友人の心にかやうな考が浮んだのであります。所がふと氣が附いて見ると、機は既に水平に飛んで居て、高度計は四百米を指して居りました。卽ち友人は雲の中で四百米落ちたゞけで、幸に墜落を免かれたのでありました。後で、附近の或農夫の話を聞きましたが、子供が、「あれ、飛行機が落ちる。」と叫んだので、戸外へ出て見たら、最早低い處を平らに飛んで居たと申しました。これは入道雲の中に異様な氣流があつた爲に、危難に出あつたのでありました。（學士會月報）

*埼玉縣入間郡所澤町、東京市の西北凡そ八里。

*名は隆吉。詩人。

一四　雨

北原白秋

雨がふります。雨がふる。

遊びにゆきたし、傘はなし。
紅緒のかつこも緒が切れた。

雨がふります。雨がふる。
いやでもおうちで遊びませう。
千代紙折りませう、疊みませう。

雨がふります。雨がふる。
けん〳〵小雉子が今啼いた。
小雉子も寒かろ、寂しかろ。
雨がふります。雨がふる。

お人形寐かせど、まだ止まぬ。
お線香花火もみな焚いた。

雨がふります。雨がふる。
晝もふります。夜もふる。
雨がふります。雨がふる。（とんぼの眼玉）

一五　お祭

泉鏡花[1]

今も中六番町[2]の魚屋へ行つて歸つて來た家内の話であるが、其處の女房さんがおんぶをしてゐる、誕生を濟ましたばかりの赤ん坊に、「みいちやん、お祭は、—お祭は。」と聞くと、小指

(一) 名は鏡太郎。文學者。
(二) 東京市麴町區にある。

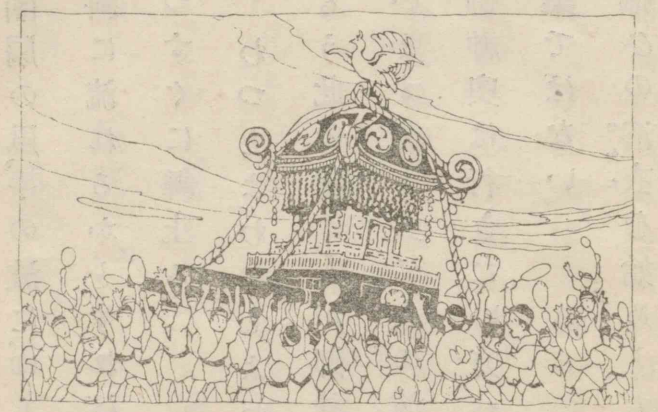
の先程な小さな鼻を撮んぢやあ莞爾々々、鼻を撮んぢやあ莞爾々々する。

山王のお渡りの猿田彦命の面を覺えたのである。それから、「お獅子は。みいちやん。」と聞くと、引掛けて居る袢纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり、取つてはかぶりしたさうである。いやお祭は嬉しいものだ。」

今日は梅雨の雨が、朝から降つて薄ら寒い。

祭の夜は、思ひ出しても何年にも、何時も暗いやうに思はれる。時候が丁度梅雨にかゝるから、雨の降らない年の、月のある頃でも、曇るのであらう。又、大通りの絹張の繪行燈、横町横町の軒提灯も、祭禮の夜は闇の方がふさはしい。紅提

灯は涼みになる　それから、萬燈は霜の御*會式を思はせる。日中の暑さに汗は流れる、血は煑える。御神輿かつぎは人のきほひが物凄い。



山王祭の神輿かつぎ

五十人、八十人、百人、ひとかたまりの若い衆の顏は、目がすわり、色は血走り、唇は青くなつて、前向、横向、後ろ向。一つに押合つて、葡萄の房に一粒づつ目・口・鼻を描いたやうで、手足の筋は凌霄花の緋を欺く、御神輿の柱の飾の珊瑚がぱつと咲き、銀の鈴が鳴渡つて、

*十月十三日日蓮上人の忌日に修める法會。上人の遷化された東京市外荏原郡池上にある本門寺が最も盛だ。

遷化（ケンガ）
所之ヵ死ぬ事

鳳凰の翼や、とさかゞさつと汗ばむと、彼方彼方に揉む樣は、團扇の風、手の波に、ゆら〳〵と乘つて搖れ、すらりと大地を斜に流れるかとすれば、千本の腕の帆檣に、つと軒の上へまつすぐに舞上る。

わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。

もう此の時は、人が御神輿を擔ぐのではない、御神輿の方が、います靈と共に、人の波を思ふまゝに釣るのである。御神輿は行きたい方へ行き、巡りたい方へ巡る。殆ど人間業ではない。

揃ひの浴衣を始めとして、提灯の張替へをお出し置き下さい。「へい、いたゞきに出ました。」「えゝ、張替へをお屆け申します。」「軒の花を掛けます。」と入れかはり立ちかはる。二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それも可い。てけてん、てけてん、はや獅子が舞歩く。

お神輿囃子、踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの、人形、活花。造花は、櫻、牡丹、藤、躑躅。活花は、あやめ、姫百合、青楓。

こゝに、お神酒所と言ふのに、三寶を供へ、樽を据ゑ、緋の毛氈に青竹の埒。高張提灯、弓張をおし重ねて、積上げたほどあかあかと、暑くたつて構はない、大火鉢に火がくわん〳〵と起つて、鐵瓶が、いゝ心持にぶつ〳〵と湯氣を立てゝ居る。

老舗の旦那、新店の若主人、番頭どん、小僧たちも、町内の若い衆が陣取つて、將棋をさす、碁を打つ。片手づまみの大皿の

鮨は、鐵砲が銃口を揃へ、めざす敵の山葵のきいた赤いのは、疾くの昔討取られて、遠慮をした海鰻の甘いのが飴のやうに少々とろけて。お定りの刺身と言ふと、だいぶ水氣立つたよりは汗を搔いて、角を落して、くた〳〵となつて、つまの新蓼・青紫蘇ばかり、濃い緑・紫に凛然と立つた處は、何うやら畫間御神輿をかついだ時の人たちの肉の形に似て居る。

「消防手御免よ。」「兄哥怒るな。」金屏風の鶴の前に、おかめ・ひよつとこ・くりからもん〳〵の肌ぬぎ。あぐら。其處が江戸だ。お祭だ。

わつしよい、わつしよい、わつしよい、こらしよい、

わつしよい、こらしよい、わつしよ〳〵。

夜が更けると、紅の星の流るゝ樣に、町々の行燈、辻の萬燈、横町の提灯が一つ消え、二つ消え、次第に暗く更くるまゝに、やや近き町、遠き辻に、近きは低く、遠きは高く、森あれば森に渡り、風あれば風に乘つて、子供まじりの聲々が、

わつしよい〳〵、わつしよい〳〵、わつしよ。

わつしよ、わつしよ、――わつしよ、……

聲ある空は、ほんのりと夢のやうな雲に燈火を包んで動く。

かゝる時、眷屬たち三萬三千のお猿さんも遊ぶのらしい。

わつしよ、わつしよ。

わつしよ、わつしよ――〳〵……

一六　住めば都

住めば都。

禍も三年。

紺屋の白袴。

二階から目藥。

ざこのとゝ交り。

旅は道連、世は情。

論語讀の論語知らず。

能ある鷹は爪をかくす。

鷹は死しても穂はつまず。

長者の萬燈より貧女の一燈。

一七　家庭日記

七月廿一日(火)　曇。　ご飯ごしらへ。

丁度五時に目が覺めた。　愈、今日から、家事の實習。　勝手に行くと、母様は笑ひながら待つていらつしやつた。　早速襷がけになつて、水を酌むかまどの下を焚きつける、火をおこす、其の間味噌をする。　ついた筈のかまどの火が消える。　餘り騷がしかつたのか、赤ちやんが眼をさます　母様はいつもとちがつて今日は少しも構つて下さらず、見てばかり入らつしやる。　やう〳〵御膳立の出來たのが七時半。　これはしまつた。　御飯に少し心が有る。

言ふは易く、行ふは難し　口で言ってみると易いように思ってみるが自分が実行すると中々出来にくいものだ

七月廿二日(水)　晴。　掃除

七時に朝飯が濟んだ。後始末に一時間かゝつた。八時にお掃除をした。拂ふ、掃く、拭く。濟んだのが十時。すつかり疲れた。座敷の隅は丸くは掃かなかつたが、花瓶を倒して床の間を水だらけにしてしまつた。

念には念を入れよ。

七月廿三日(木)　快晴。　風。　洗濯。

有ること〳〵山のやう。岡田の姉さんの處からも、練習の材料だと言つてお取寄せになつて、都合十枚の洗濯物。始めの一枚・二枚は丁寧に洗つたが、段々疎略になる。腰は痛む、手は赤くなる。着て居る着物も洗濯した様に水だらけになる。母様はちよいちよいのぞきに來られる。皆干し並べ、見上げてほつと一息吐いた時は、滿艦飾と言ひたかつた。

我が身をつねつて人の痛さを知れ。

七月廿四日(金)　曇　涼しい。　客來。

叔母様の御出。お手が鳴る。お茶を運ぶ。かれこれしてゐる中、兩親は中座して約束の處へお出掛けになつた。後を引受けて、叔母様の御相手は、隨分苦しかつた。何も話がない。幸ひ學校の事を聞かれたので、少しは口がきけた。日頃のお饒舌も何の役にも立たぬ。三十分ばかり過ぎて

母様が御歸になつたので、胸撫下した。

渡に舟。（向ひに渡らうと思つたが舟がなかなかつかまらずすぐ上舟が来たやうに具合のわるい時たゞ都合のよい時がまた）

七月廿五日(土)　晴。暑い。子守。

「ねん〳〵よう。おころりよう。」赤ちやんは中々眠らない。髪の毛はなぶられる、汗は流れる。時々泣出す。こつちも泣きたくなる。見かけほど子守は樂なものでは無い。其の中赤ちやんもあきらめたか眠り出した。

子を持つて知る親の恩。

七月廿六日(日)　晴。暑い。蟲干。

天氣を目がけて蟲干。かうかけならべて見ると、中々私の着物も多い。春夏秋冬が一時に一室に集つた　妹が珍しがつて、まつはつて邪魔になる。此の襦袢は伯母様からの御祝、あの袴は姉様からの戴きもの等、幾年かの歴史が一時に思ひ出されて一つ心の中にこんぐらかる。

土用干、疊の上をまはり道。（きものが干してあるから家のゆかもまはり道をしなければならなり）

七月廿七日(月)　曇　蒸暑い。畑作り。

朝飯前に俄百姓は裏の畑に立つた。鍬を持つ手も覺束なく、こはい様な手つきで肥料をやる。人が見たなら嘸をかしからう。抜くより生えるが早い雑草、これからは雑草と根氣比べ。休み中は草一本もはやしては置くまい。朝飯の料にとて葱を抜く。

流るゝ石に苔つかず。（活動してゐる人にはわすらはしいものかくつついたりはしない　つまり調は来ない）

一八　暑中見舞

その時々の身勝手には候へども、誠に冬の方遙かに凌ぎ易く存候。今日の暑きこと、正午には早九十度を越し候。暑さを口實とには御座なく候へども、宿題は始めの豫定と違ひ、休は半ばを過ぎて未だ三分一も片附かず、朝夕の涼しき程になど恃み居り候怠と、我ながら恥かしく存候。御許様には、最早全部御濟ませにて、例の草花の御手入れに御明し暮しの事と存候。

久し振にての御歸省なれば、御家庭の御情味一入と存候。此方休暇と申しながらも別段變れる事も無く、折折は學校の庭なつかしく存候。先生方も多くは御歸省又は御旅行遊ばされ候由、御見舞狀差上度存じ、筆とり候へども、日頃の拙文惡筆とて書いては捨て、捨てゝは書き、未だに其の儘と相成居候。それにつけても御許様の羨ましく存候。

御兩親様、御妹様によろしく聞え上げたまはりたく、母よりくれ〴〵もよろしくと申出候。あつさの折から御攝生專一に祈上候。　かしこ。

一九　働く料簡

和田萬吉*

働く料簡

*文學博士。國文學者。

乞食、貴婦人の後ろに踵いてうるさく施をねだつたが、斷られて離れ際に、「少々戴けば、今覺悟したやうな事もせずに濟みますに。」と言つた。貴婦人、さては乞食は自殺でもする積りかと氣味惡るくも亦不便にもなり、喚戻して五十錢銀貨を遣りながら、どういふ譯で今のやうな言を云つたと聞くと、乞食は錢を握つて、

「奥樣、私は今日一日貰つてあるきましたが、何處でも下さいません。此の五十錢も戴けなかつたらそれこそしかたなしに働く料簡になつたでせう。」

高い川

或人、積荷が重過ぎて、船緣と水際が摩れ〳〵になつてゐる船を見て、

「危いものだ。此の川がもう少し高かつたら、それこそ船は沈んでしまはう。」

調子の惡い返事

貴婦人が、危く難破を免れた船の水夫に、十分の同情を寄せて、「お前さん大きな浪を被つた時はどんなでした。」と聞くと、無調法な水夫「濡れました。甚く濡れました。」

子供と學校

甲「私は子供を學校へ遣らうとする氣にならない。」

乙「それでは、君は家庭教師を賴むつもりかね。」

甲「いゝえ。」

乙「では君の子供は病氣持かね。」
甲「なに病氣持といふ譯ではない。」
乙「へゝえ。君の子供は、利口にならなくても可いといふ次第かね。」
甲「そんな譯でもない。」
乙「それでは、君の子供を學校へ遣らない理窟は何です。」
甲「色々あるが、其の中で先づ一番大切なのは」
乙「はて何だらう。」
甲「私に子供が無いといふ事です。」（新西洋笑府）

文學者。

二〇　震災記

加能作次郎

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、丁度晝飯の食事に向はうする時だつた　突然體を投げ出されるやうな大激動を感じた　地震だと思つたが、固よりあんな大地震にならうとは思はず、最初は柱時計の墜ちさうなのを支へてゐた位だつたが、其内方々の壁が拔け落ちる、棚の物が、がたがた落ち始める。　家全體がが（ガクガク）ら〳〵と鳴つて、今にも倒潰しさうな大震動を始めたので、もう時計どころではなく、夢中で、側に泣き叫んでゐた二人の子供を両腋に抱へ込んで、簞笥の前にひれふした。　震動はます〳〵烈しく、何時止むとも覺えず、長男は縁側から庭に飛び出して、物干杭（ポスト）につかまつて泣叫んで居り、臺所にゐた妻は激震と同時に其の塲

に打倒れた赤ん坊を引抱へて外へ飛び出し、妻の叔父と下女とは玄關口で何か大聲に叫びながら右往左往してゐた。其の中に襖が倒れて來る、簞笥の上の鏡臺が直ぐ眼の前に轉び落ちて來る、それらを見た刹那、私はもうだめだと思つて、子供を兩腋にしかと抱きしめたまゝ外へ飛び出した。外にはもう近處の人たち——男は皆勤めに出てゐたので、女ばかりだつた、——が、取亂した姿で出てゐた。誰も物は言はず、只恐怖に慄へた眞蒼な顏を見合してゐるばかりであつた。

間もなく搖り返しがやつて來た。最初のと殆ど變らぬ程の激動だつた。隙を見て私は人々に、火の用心を注意しな

牛込區原町の成城學校の横手にある水野の原。

から、取敢へず近くの原*つばに家族を避難させた。其の場合私の最も恐れたのは火災であつた。それも無理はない、大地震の後には、きつと火災が伴ふと聞いてゐたし、好晴ではあつたが、二百十日の大荒れを想はせる南の强風が吹募つてはゐたし、おまけに水道が地震と同時にばつたりと止つてしまつたし、丁度晝飯時の火の氣のある時だつたから。

所が、果してあたりがきな臭くなつてきた。驚いて四方を見廻すと、南方の空に濛々と黑煙が立昇る。しかも火の手が中々大きい。おまけに眞風上で、黑煙が自分等の家の上空にまで擴がつてゐる。

原つぱには近隣の人たちが百人ばかり逃げ出して來て、てんでに座蒲團を頭に被つたり、地上に敷いたりして、わいわい騒いでゐる。其の中又第三回目かの激震が起つた。大地がゆら〳〵と眼に見えて搖れ、深く落ち込んで行くやうな氣がして、人々の狼狽が一層甚だしくなつた。一方に火の手がます〳〵大きく盛になる。風は強い。皆「大變だ、大變だ。」と叫びながら駈けまはつて歩く。私は子供等を妻の叔父と下女とに託して置いて、取敢へず重要なものを取出すために、家へ入つた。其の間、幾度かの餘震が襲つた。茶の間は食卓の上に壁土が一ぱいに被ひかぶさり、既に飯のよそはれてあつた茶碗などがひつくりかへり、慘澹たる光景を呈してゐた。

原つぱには、もう荷物などを運び出してゐるものもあつた。急に空腹を覺えたので、握飯を作らせたものゝ、中々咽喉へは通らなかつた。

火事は方々に起つて居る。小石川あたりの上空に、まるで眞夏の層雲のやうな物凄い黑煙が高く天に沖してゐるのが見えた。誰いふとなく、砲兵工廠が爆發したのだといふことが傳はつた。其の外麴町の九段附近や神田の神保町あたりが盛に燃えつゝあるとの報が傳はつた。

其の内巡査が二人連れで、息を切らしながら駈けつけて來て、

「四時から六時までの間に強震があるさうです。震源地は江戸川沿岸で、關東一帶は大被害ださうです。それから火事に氣をつけて下さい、今方々に大火が起つてゐます。」

と、叫ぶやうに言つて走つて行つた。

其の時士官學校方面に新しく火の手が起つた。それは直徑にして七八町も離れて居るので、ふだんならば對岸の火災視する筈であるが、今は水道が斷たれ、風が強く、手の附けやうも無いので、非常な不安恐怖に襲はれた。

其の中急に風向が逆に變つた。同時に士官學校の火事が下火になり、黑煙が白く薄れた。

*陸軍士官學校。牛込區市ヶ谷本村町にある。

官省や會社に勤めに出てゐた人々が、下町の方から續々と歸つて來る。そして原つぱへ避難してゐる家族達と、お互に無事を喜び合ふ。段々男が殖えて來るので、氣强くなつた。彼等は口々に自分の遭難や、途中で目擊して來た慘害について話した。警視廳が燒けてゐる。建築中の內外ビルデングが倒潰して七八十人壓死した。帝劇や東京會館もあぶない。其の他の丸の內の大建築は大抵皆崩れたり壞れたりした。銀座の方に火が起つた。日本橋にも下谷にも、淺草にも、本所にも、深川にも、諸處方々に大火が起つてゐる。神田の三崎町、神保町方面は既に全燒した。九段上の火事もひどい。お茶の水や本郷の方も燃えてゐる。下町

で滿足な家は一軒もない。然るに牛込へ入つて來ると、この邊にも地震があつたかと思はれる位に靜穩無事なので驚いた。でも、神樂坂の銀行が倒れて、交番が粉碎された。柳町の銀行が倒潰して、其の下の水菓子屋や肴屋・蕎麥屋・蓄音機屋が下敷になつた——さういふ風な恐しい物凄い報道が次から次へと傳はつた。

稍傾いた殘暑の烈日が、じり〳〵と燒けつくやうに草蓬々たる原つぱに照りつけて居る。空は青く深く、一點の雲もなく澄みきつて、思ひなしか、却つて物凄く、天變地妖の襲來を思はせる位、澤山の蜻蛉の群れて飛んで居るのも、常とは異つて無氣味だつた。

夕方近く、一度家の中の亂れを取り片附け、もう大丈夫だらうから、此の儘居ようかとの話も出たが、さう言つてゐる間にも、頻々として餘震が起り、且夜中に强震が襲ふだらうとの警報があつたので、矢張り原つぱに野宿する方が、安全だと定めた　近所の人達も、此處に野宿することにしたので、私は一層心丈夫に思つた。

日が暮れた、東から北にかけての半面の空が眞赤に染まつて、物凄い大噴煙が、私達の頭上まで高く掩ひかぶさつてゐた。ドヽン、ドヽンと、遠雷の樣な響が、絶間なく聞えた　砲兵工廠の火藥の爆發だらうと皆噂した。現場を見て來た人や、現場から逃げ歸つて來た人々は、誰も彼も下町の方は

全部火の海になつて居るなどと、物凄い光景を日々に語つた。淺草の十二階が倒れて、無數の死傷者を出したとか、順天堂始め駿河臺の多くの大病院が燒けて、澤山の病人がどうしたとか、帝大が燒けてゐるとか、三越や白木屋なども危險だとか、砲兵工廠の爆發で死體が幾つも〳〵天から降つて來たとか、まるで嘘のやうな恐しい物凄い話ばかりだつた。

宮城前の避難民

夜が更けるに從つて、一層凄愴の氣が增した。風は依然と

＊本郷區湯島にある病院。御茶之水を隔てゝ駿河臺に對す。

して強く西方の空には星が降るやうに瞬き、銀河の流も見られたが、他の半面の空には、火焰の反照が益廣く、濃く、深く、殷々轟々たる物の響も一層強く聞えた。暗黑な原つぱに、樹の蔭、叢の下に莫蓙や雨戸など敷いて、二十餘軒の家族が隣り合ひ向ひ合つて、寢轉んだり蹲まつたり、恐怖に脅えながら、ぼそ〳〵と話したりして居るのを、數個の細々とした裸蠟燭の火が、ちら〳〵と明滅しながら仄かに照して居る光景は、哀れに心細く賴りないものだつた。唧々たる蟲聲が一層あたりを寂しいものにした。

時々大地の震動が起つては、寢て居るものが刎ね起き、坐つて居る者が飛立ち上るといふことが幾度も繰返された。

只子供達だけは、何も知らずに、滴る夜露を受けながら、すやすやと寐入つて居る。誠に涙ぐましいほど可憐だつた。」

眞夜中の二時過ぎだつた、さすがにひつそりと靜まつてゐた原つぱの入口の方に、新しい話聲が起つた。近處の人で、大磯*から急遽歸京したのだといふことが分つた。其の人は、前日用事で大磯へ行つたのだが、晝間の激震と同時に、東京の自宅が案ぜられ、早速歸京しようとしたが、汽車がなく、やつと自轉車を一臺買つて、十時間ぶつ通しで東京まで駈戻つたのださうで、其の途中の被害の慘狀はとても東京の比でないと話した。途中一軒として倒潰しない家はなく、道路には大龜裂が生じ汽車は顚覆し、鐵橋は破壞し、火災が

*神奈川縣にある町。

方々に起り無數の死傷者の阿鼻叫喚の中を夢中で逃げて來た氣持は、迚もお話も出來ないと言つた。殊に大磯横濱間が最も激甚で、横濱の如きは全滅だといふ話もした。

「鎌倉(一)あたりはどうですか。」

と私は尋ねた。

「勿論あの邊も全滅でせう。湘南地方は一帶にひどいやうです。大磯(二)でも、平塚(三)でも、藤澤(四)でも、大船(五)でも、戸塚(六)でも倒れない家は殆ど一軒もありません。殊に海嘯がやつて來ましたから、海岸の方は尙更助かりません。」

とその人が答へた。

不安な一夜が明けた。

(一)(二)(三)(四)(五)(六)皆神奈川縣に在る。

「まあ、どうかかうか、お互様に無事に一晩過ぎましたが、此の分にどうか何事もなくて濟んでくれゝばよう御座いますが。」

かう私達はお互に、不安の裡にも、兎も角も一夜事無きを得た幸福を祝し合つた。

顧みると下町方面の朝空には、一面に漠々たる大火煙が漲り掩ひ、恰も夕燒に彩られた莊嚴な眞夏の大層雲を見る樣であつた。間もなく私達は、京橋も、日本橋も、神田も、淺草も、偖は本所も、深川も、昨夜一夜の中に、其の大半を燒き盡され、今や全市全滅の大慘害を免るべくもなからうといふ、驚くべき恐るべき報道を耳にした。更に續いて不穩なる者が、此の機に乘じて、この大天災のもたらした慘害を一層大きくしさうだといふことも、誰言ふとなく傳はつて來た。さうしてそれに對して、各自警戒を一層嚴にすべき旨が傳へられた。一夜の無事を喜んだ私たちは、こゝに又新たな、そして更に一層深刻な不安恐怖におびえずには居られなかつた。

二一　水の御馳走

島崎藤村*

もし〳〵、お願ですが、水を一杯御馳走して下さいませんか。」

と庭の楓が聲を掛けました。

*名は春樹。文學者。

日の光が輝き滿ちた後でもたから、庭に在る植木と云ふ植木はみんな乾いて居ました。父(一)さんが楓の樹の方へ行つて見た時は、庭の石から土までも乾いた色をして居ました其處は小(二)父さんのお家の庭の隅で、父さんがよく休みに行く處でした。青い若葉に眼を樂しませてくれる楓の樹などとはお友達のやうになりました　父さんも庭掃除などをして働くことは好きでした。そろ〳〵日もかげつて來た頃でしたから、勝手口の井戸の方へ水汲みに行きました日頃お友達のやうな楓や乙女椿の爲に、手桶を提げて來て水を御馳走するのも樂みに思ひました。

「さあ御馳走しますよ。」

(一) 島崎氏自身のこと。自分の子に對していふ。

(二) 島崎氏の親戚吉村氏のこと。

と云つて、父さんが柄杓の水を楓の枝の方まで送つてやりますと、それまで萎れ返つて居た若葉が、急に夕立でも降つて來たやうな騷をしました。其の楓は、かなり年數のたつた古い木でした。父さんの送つてやる水は楓の古い幹を傳つて、根元の方まで浸みて行くやうに流れました。

「どうか、お序に此方へもお願ひしたいものです。私はもう渴いてたまりません。」

と言ふのは、楓の横に隱れて居る楠でした。父さんは井戸端の方から手桶の水をかへて來まして、

「どれ、お前さんにも一杯。」

と背の低い乙女椿へ頭から水をあびせてやりました

此の騷を高い處から眺めて居たのは幾株かある太い青桐でした。青桐はあんまり背が高いものですから、頭の處へまだ日が當つて居たのです。庭の植木の中で一番芽出しも遲く、一番のんきらしいのも此の青桐でした。見ると、楓でも、楠でも、乙女椿でも活き返つたやうになつて居ました。流石の青桐も、之には羨しさうな顏をして居ましたから、其處へも父さんは水を運んで行つてやりました。

此の青桐の根元から、飛石傳ひに庭を廻つて行きますと、其處には小母さん達の居る部屋の見える處がありました。

椎だの、山茶花だの、梅だの、紫陽花だの、長春だの手洗鉢の側にしやがんで居る葉蘭までが咽喉を鳴らして、みんな水の

*吉村氏の妻。

御馳走を待遠しがつて居ました。其處へ父さんが手桶を提げて行きましたら、あつちでも、こつちでも渴いて堪らないといふ者ばかりで、我勝ちに早く父さんの打つ水にありつかうとして、「水、水。」と催促しました。

「どうか、お早い所をお願ひ申します。」

と呼ぶのは椎でした。

「あんな椎などは後廻しでもいゝでせう。こつちの方へ先によこして下さい。」

と梅が言ひました。

「後廻しでもいゝとは何です。梅の奴は行儀が惡くて、此の庭中の者が、あの梅には何程迷惑して居るかも知れま

せん。」

「さう云ふ椎こそ、何時でも出しやばる癖に。此の庭を自分の庭だと言はんばかりに、大きな顔をして居るのは誰ですか。紫陽花でも、長春でも、隅の方に小さくなつて、言ひたい事も言はずに居るのは、一體誰の爲ですか。」

「そんなら言ふが、そんな長い枝を延し放題延してよこして置いて、それでも我儘で無いとは言へるだらうか。梅のひねくれて居ることは、誰だつても知つて居ます。それを知らずに居るのは梅ばかりです。少しは自分といふものを知るがいゝ。」

御馳走を前に置いて、椎と梅とがこんな事を言ひました

山茶花や紫陽花は片隅の方に默つて居ましたし、長春は塀の上に頰杖でもつくやうな格好をして、長く寢そべりながら此の話に耳を傾けて居ました。相變らず、のんきらしいのは靑桐でした。靑桐は何處を風が吹くかといふ顏附で、椎や梅の爭ふのを見下して居ました。

「喧嘩は止さうぢやありませんか。それよりか水の一杯も早く頂きたい。」

と言出したのは葉蘭でしたが、椎は中々聞入れようとしませんでした。

「葉蘭なんか、默つて引込んで居ればいゝのです。そんな手洗鉢の側にしやがんで居て、水が欲しいと言へた義理

ですか。葉蘭は慾が深過ぎます。」

斯う言つて居る椎の方へも、梅や紫陽花や山茶花の方へも、それから柄杓の水が容易に屆かないやうな長春の居る方へも、父さんは水を送つてやりました。父さんは手桶に二杯も水を抱へて來て、ぶつ〳〵言つて居る植木の頭から冷たいのをあびせ掛けました。慾が深いと椎に言はれた葉蘭なども、實際渴き切つて居たと見えて、父さんの打つ水を廣い葉に受けて、ばら〳〵〳〵音をさせるやら、それは大騷でした。

庭の植木と云ふ植木は、みんな活き返つたやうに見えました。先刻まで我勝に早く〳〵と水の催促をして、がや〳〵言ひ爭つて居た聲も何時の間にか靜まつてしまひました。其の時になつて見ますと、水の御馳走にありつかないのは一つもありませんでした。みんな濡れました。そして、涼しさうな雫があちこちの若葉から滴り落ちました。

父さんは僅かな骨折と、手桶に汲んで提げて來た水ぐらゐで、日頃お友達のやうな庭の草木をこんなに悅ばせたことを樂しく思ひました。

「お蔭で、庭のもの一同せい〳〵しました。又私どもを見に來て下さい。私もせつせと支度をして置いて、其のうちに花の盛りをお目にかけますよ。」

と長春が言ひました。（をさなものがたり）

二三　佐藤つる

井上　毅

佐藤つるは岡山縣後月郡出部村の人なり。幼くして父みまかりければ、母と姉と三人にて世を送りけり。素より貧しき家なれば、母は二人の女を育てんとて、人に傭はれなどして辛うじて年月を經しが憂苦の餘り、遂に精神の病にかかりぬ。姉なる子は愚かにて、物の理を辨へず。つるは時に僅かに七歳なりしが、姉を勵ましつゝ、共に母の病をいたはりけり。されど、生計の道を得ること難く、一家殆ど餓に迫るばかりなりき。たまゝ憐みて糧を與ふるものあれば、つるは喜びてこれを受け、まづ母に捧げ、次に姉に進め、尚

*梧陰と號す。文部大臣、子爵。明治二十八年歿す。

餘りあれば、自ら餓を支へけり。

後に、母の病やゝ癒えて、姉は近村の人に嫁ぎければ、今はつる一人して母を養ひ、人の畑を借りて耕し、朝は夙に出でゆき、夜は晩く歸り、風をも雨をも厭はず、男子に劣らず働きけり。畑に出でたる時も、時々は小走りして家に歸り、母の顏色を伺ひけり。天氣暖かなる時などは、前のふごに母をのせ、後のに鋤・鍬の類を載せて弱き肩に擔ひもて行き、母をば田の畔或は樹の蔭にいこはせ、おのれ其の傍に鍬を執りて母の心を慰めけり。

つるは平生麁衣惡食に甘んじ、蓬髪に櫛をだにさゝざれども、母の好むものは、なにくれとなく求めて得させけり。母

いたく老いて、夜、眠にえ就かぬを、つるは枕邊に侍りある時は背を撫で、ある時は肩を揉みなどして、母の眠るをまち、さて、細き燈のもとに、絲を紡ぎ、小車を繰りて、夜ふくるまで働きぬ。

ある人その孤勞を憐みて、「夫を迎へよ。」などすゝめしに、つるの云へるやう、「他人を我が家に入れなば母の心安かるまじ。母のいまさん間は、獨身にてあるこそよけれ。唯貧しき爲に心に任せぬ事の多かるぞ、うらめしき。」とて涙に咽びしを、聞く人袖をうるほしけり。事、官に聞えて、明治十八年十一月、縣令より金若干を賜ひければ、つるは大いに悅び「これ父母の恩なり。」とて、直ちに歸りて母に告げ、又、親戚隣里の人に向ひて厚く恩を謝したりき。

明治二十三年六月、母の病おもりて、賴少く見えければ、つるは憂に堪へかねて、十日餘りは夜も睫を交へずして、一筋にいたはりけり。母いまはの際になり、つるを呼びて曰く、「汝かよわき身ながら、長き歲月の間家事を勤め、孝養遺る所もなし。今より後、汝は自らの身を大切にし、又、汝の姉をいつくしみてよ。」といふ。つるは「仰にやおよぶべき。心に懸けさせたまふな。」と答へしかば、母は眉を開き、ほゝゑみてぞ身まかりける。時に年七十八なりき。つる、母の屍に抱きつき、いたく悲しみ歎きて、人ごこち絶えぬるばかりなりき。つるが日夜勤勞せし結果として、田圃二段までひらけて、そ

の收穫せしものは衣食の料にあてゝなほ餘りありければ、それをばさきの縣令の賜とあはせて、郵便局に預けおきけるを、このとき取出して葬の料に充てけり。

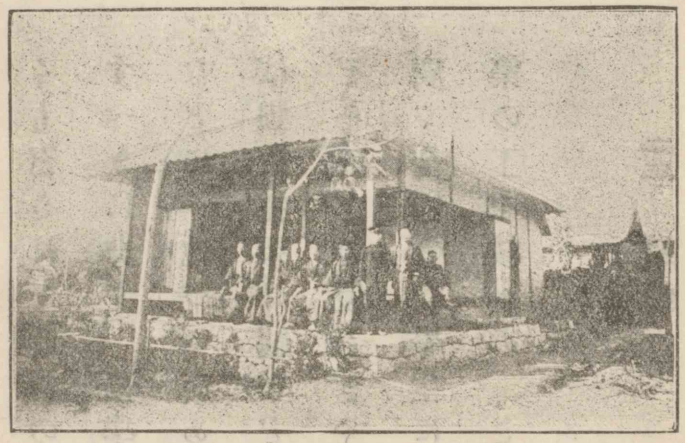
佐藤つる
大正六年九月撮影

さて、喪をはりたるのちも、朝夕に香を焚き、火を點じ、果物を供へなど、母の生けりし時のごとくにし、又、姉によく事へて、母の遺言をばあだにせざりけり。

つるは、かく孝行すぐれしのみならず、一家の主として公令を守り、田租・雜稅といはず、掟のまに〳〵人に先立て納めけり。明治二十四年十二月、事雲の上に聞えて、勅定の綸綬褒章を賜ひ、善行を表彰せられたり。

（梧陰存稿）

大正五年二月編者の一人、事を以て岡山縣に往き、途につるの鄕閭を過ぎ、その廬を訪ひぬ。つる時に年七十餘。愉色怡々として出迎ふ。懷舊の情話綿綿として盡くる所を知らず。その言皆雙親鞠育の恩を追念するにあらざるはなし。終りに、恭しく一の笹折を捧げ



佐藤つる再築家屋

出でて、曰く、「昨秋御大禮の節、綠綬褒章を佩ぶるが故に、辱くも召されて賜饌の末班に列せり。是わらは一人の私すべきに非ず。修學旅行の途次茅屋を訪はるゝ女學生などに一粒づつ薦めて當日の光榮を頒つなり。」と。見れば强飯・搗栗・切鰒などの乾からびたるが半ば殘れり。何ぞその志の優しきや。つるの家嘗て燒けぬ。有志相謀り、廣く全國の女學生に募り、たちどころに千餘金を得て、再築の工を竣へぬ。こゝに掲ぐるもの卽ちその寫眞なり。

二三　蜻蛉

志賀直哉*

*文學者。

暑い。今年の暑さは不自然にさへ思はれる。庭の紫陽花が、木一杯に豐かにつけた美しい花を、さも重さうに垂れて居る。八手は葉の指を一つ〳〵上へつぼめて、烈しい太陽の熱を避けようとして居る。今年八手の根元に植ゑた鬼百合は、まさかこれ程の暑さが來ようとは思はなかつたのだらう、ひよろ〳〵と四五尺も延びて、いまはそれを後悔して居る風である。莖は蕾の重みに堪へず、蕾の尖つた先を陽炎の立昇る乾いた地面へつけて、じつとしてゐる。それは死にかゝつた鳥のやうに見える。

麥藁蜻蛉が飛んで來た。蜻蛉はかん〳〵照りつけられて苦も何も着いて居ない飛石へ來てとまつた。そしてしばらくすると、其の暑さの中に滿足らしく羽根を下げた。自

分は一月程前、庭先の溝で蜻蛉の幼蟲らしい醜い蟲が、不器用に水の中にもぐつて行く姿を見た。あの蟲が殼を脱けて、かうして空中を飛んで來たのであらう。此の暑さにもめげない蜻蛉の幸福が思ひやられる。蜻蛉は秋までの長くもない命を少しもあせらず、じつとして暑さを樂しんで居る。凡そ十分もさうして居た。其處に今度は鹽辛蜻蛉が飛んで來た。黑い影が地面を縱横に動いた。すると今までじつと羽根をへの字なりにしてゐた麥藁蜻蛉が、眼ばかりの頭をくるくると動かした。と思ふと、急に輕い速さで鹽辛蜻蛉を眼がけて飛立つた。羽根と羽根との擦れ合ふ乾いた音がして、二匹の蜻蛉は追ひつ追はれつ次第に空高く飛んで行く。そこにはもくもくとしたまぶしい夏の雲があつた。蜻蛉は暫くの間淡い點になつて、見えて居たが、到頭私には見えなくなつた。（白樺の森）

二四　明治天皇の御遺物

笠井信一

[三]先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたにより、私共は定刻に參内致しました。先づ權殿參拜の後、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。餘り廣くない二間續きの御室で、瀟洒たる檜の白木造ではありますが、別段これと申す御裝飾も施してござ

[二]當時嚴手縣知事であつた。貴族院議員。
[三]大正二年一月。

いません。御室は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に据ゑてございます。私は御室の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらせられたであらうと感じました。それにつけても、

年々に思ひやれども、山水を
汲みて遊ばん夏なかりけり。

の御製を思ひ起して、恐懼に堪へませんでした。のみならず、此の御室にはストーヴの御設備はございますけれども、三十七年の冬以來、如何なる酷寒と雖も一切御用ひがない。これは侍從方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさ

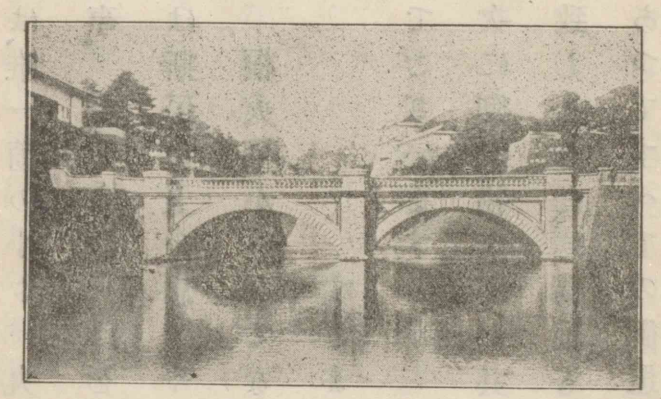
せられた第でありませうと申すことで、そしてそれ以來は、唯一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今、その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは斯民の上を思ひやらせられたる御製、

桐火桶かきなでながらおもふかな、
すきまおほかるしづが伏屋を。

でございます。

次に御遺物全部が其の儘に据置かれてある御別室を拜觀致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日、卽ち先帝最後の出御當時のまゝに御備付になつてございます。床の間に

は其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劒數振横たはり、御机は中央に南面してございます。



二重橋

まづ、御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に燒痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つて入らせられた節、臣下より政務を言上致しましたので、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草の火が墜ちて此の燒痕がついたのを、侍臣より幾度か御取換を願ひ出ましたさうでございますが、斷じて御許がなかつたとの御事。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同樣で、一寸位にへつてをるのがございました。鋏も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に日常御用ひになつた學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。事事物々につけて御儉德の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。御椅子の下に犬の皮で補修された古い獅子の毛皮が敷いてございます。其の傍

にホワイトシャツを入れる白いボール箱が澤山に積重ねてございましたが、これは書類を入れるに便利であるとて御手許に留め置かせられたものであるとのことでございました。　大臣方より上奏して御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうでございますが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる、そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも、御棄て遊ばされず、それに折節御詠遊ばす御製を御認めになりますのを御側の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのださうでございます。

偖、御次の間には造花や彫刻や種々な物が備へてございました。　之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸あらせられた節、御奬勵の爲、御持歸り、又は、御買上げにならせられた物らしうございます。　それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてゝ殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、其の儘になつてございます。　その他美術工藝品の如きも、皆御奬勵のためで、世の常の嗜好とは全く趣を異にしていらせられます。

千よろづの民と偕にも樂しむに
ます樂みはあらじとぞ思ふ。

の御心も思合されました。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々

として進歩し、我等は世界一等國の民となりました。顧みれば、我等は長い間、聖天子御一人に非常なる御心勞をお掛け申し上げたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民のちからのかぎりつくすこそ、

わが日の本のかためなりけれ。

の御製をも同時に服膺して、力のあらんかぎりを盡し、以て「我が日の本のかたため」のため、應分の貢獻をなし、先帝の御高恩の萬分の一に對へ奉らうと考へる次第でございます。

（巖手縣學事彙報）

二五　乃木大將夫人

乃木大將が精忠無二の偉人として、兒童走卒にまで崇められると共に、夫人は貞淑並びなき烈女として千載の末までも女性の鑑と仰がれるであらう。

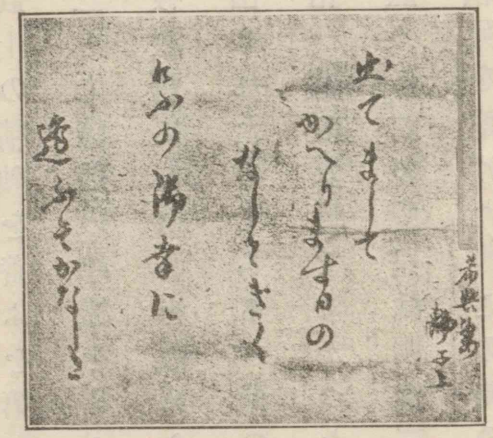
夫人は極めて質實勤勉な方であつた。平生物見遊山などは少しもせられず、儀式などの特別な場合の外には、一切絹物を身に着けられなかつた。かの西*那須野の別莊に居られた時は、いつも田畑へ出られて、農夫を指揮せられるは勿論の事、自身にも鋤・鍬を執つて働かれた。食時頃訪問の客が有れば、夫人みづから豆腐汁に鰺の鹽燒といふやうな料理を拵へて饗應されるのが例であつた。「人樣が來られた

*栃木縣那須郡。

とて、急に變つた旨い料理を註文するのは馳走にはならぬ。總べて身分相應な物を自身にこしらへて出すのが眞の馳走である。」との姑御の敎を守られたのであるといふ。そして、前掛樣の物を不斷着の上に纏ひ、かひ〳〵しく臺所で立働き、自身膳を座敷に運ばれるのを見る客は、誰でも夫人の心盡しに感ぜぬものは無かつた。

乃木夫人

夫人は、又、非常に謙遜な方で、少しも容體ぶるやうなこと無く、誰にも親切で、慈悲深かつた。殊に大將の部下の者に對しては、厚い同情を以て世話をせられたので、いづれも大將の威德に心服する外、夫人の恩義に一方ならず感謝してゐた。近處の商人や、其の他、出入の人々にも、隔意なく氣輕につき合はれるので、誰も彼も皆よく懷き慕つてゐた。書生や下女や馬丁を呼ぶにも、決して呼捨てにされたこと無く、つひぞ荒らかに叱られたことも無い。萬事が斯ういふ風であつたから、凡そ夫人に接する人といふ人は、いづれも其の高い溫かな人格に感動せぬ者は無かつた。



乃木夫人筆蹟

勝典・保典二兒の教育は、大將が身軍職にをられる關係から、家に居られないことが多いので、夫人が專ら之に當られた。武士の精神を養ふを第一とし、剛健な身體を鍛へるのを第二とし、諸般の學識を得るのを第三として、家庭教育にも學校教育にも眞心を籠められた結果、あの立派な二人を作り出されたのである。此の一點から見たゞけでも、夫人が尋常一樣の女性でなかつたことが分る。

然るに、この愛兒は明治三十七八年戰役に二人とも名譽の戰死を遂げた。この時の夫人の胸中はそも如何であつたらう。並の母親であつたなら、身も世もあられず、嘆き悲しんで、氣も狂つたかも知れない。然るに、夫人は吾が子の御國の御用に立つたのを喜ばれたゞけで、大將の言置かれたやうに、三棺揃はねば葬儀は出さぬと、涙一滴人に見せられなかつた。立派な武夫になれかしと神に念じ、佛に祈り、吾が手一つに育てあげた前途有望の二人の子を二人とも失つて、誰が悲しくなからう、心細くなからう。それを、國を思ふより外なき大將の妻として、御國の御用に立つたと喜んで、己が悲をじつと怺へられた夫人のけなげさは、吾が子の戰死した地點に立つて「山川草木轉荒涼。」とのみ口ずさんで、泣かれなかつた大將に優るとも決して劣りはせぬ。

同じ戰役中芝の琴平神社に日參して、我が軍の勝利を祈る婦人が有つた。服裝の質素なのに似ず風采の氣高いのと

*東京市芝區琴平町にある。

祈願に熱心なのとを見て、何れ然るべき軍人の妻女ではあらうが、果してどなただらうと、神職等が密かに探つて見た。處がそれが乃木大將夫人だと知れて、皆々偖はと大に感じ合つたといふ。

*谷子爵等の發起した報國會には、夫人は其の會の理事として働かれ、又、會で恤兵の爲に襯衣を縫ふことゝなつたところ、夫人は日々一所懸命に其の裁縫に勵まれた。そんな時にも、夫人は口癖のやうに、「夫が旅順で澤山將卒を殺し、誠に陛下や父兄に相濟まぬ。」と語られたといふことである。「愧づ、我何の顏あつて父兄にまみえん。」と歎かれた大將と實に同心一體ともいふべき美談ではないか。

*谷干城。

大將の自殺は忠魂・義膽の凝固りで、夫人の殉死は良人に對する同情・貞節の一徹心である。これが眞に優しい、女らしい、而も凛とした日本婦人の鐵石心を發揮したものである。ともすれば、婦道の廢れようとする今日、夫人の如きは實に無上の活教訓を示された方と謂ふべきであらう。

*著述家。蘆花と號す。

二六　秋分

*德富健次郎

朝

今日は秋分なり。

早起、外に出づれば、白露地に滿つ。稻穗・粟穗・薄の花・蘆の花すべて露の中にあり。蟲聲水のごとく流る。

晝

彼岸の中日なれば、近在の老弱・男女、藤澤に鎌倉に寺詣して歸る者織るが如し。川邊には鯊を釣る人多く並立てり。午後の日悠々として、碧潮川に滿ち、日光空に滿ち、百舌鳥の聲耳に滿つ。

夕

日は入りぬ。無花果の葉蔭薄暗くなりて、芙蓉の花も漸く凋まんとす。空に雁聲あり。

十五夜に影を見せざりし月は今宵照りいでぬ。庭の眞砂、霜の置けるる樣に白み、樹影黑く地に涌きぬ。白萩月に映じて雪の如し。（自然と人生）

二七　まことの愛

柳澤淇園*

*大和郡山藩士、名は里恭。諸藝に通ず。寶暦八年歿す。

われ幼き頃より詩歌・文章の道を好み、稿成れば父に見せて、添削を乞ひけり。父は一つとしてほめ給へることなくて、唯「無益の事なり。」とて、座右に投捨て給ひぬ。さるに他の者の作れる文は褒め給へば、「さりとはいかゞ。」とのみ思ひてすごしけり。

後に、妻に迎へたる女、物縫ふこと人に優れて、小袖など一日に一重ねづつ縫ひて、餘事までも事缺かず、その道の職人の見ても驚くばかりに上手なりけり。或時、われその物縫ふを見てめで賞しけるに、妻のいひけるは「わらは二歳にして母をうしなひ、繼母に育てられしが、繼母はわらはの五六歳

の頃より水仕の業を勤めさせ七歳の頃より手習・讀物・裁縫を敎へ給ひ、『實の子ならねば敎訓足らずと、末にいたりてそしられんは口惜しかるべし。』とて、敎へ習はしめ給ひければ、羽根突く遊だにえせざりき。折柄には、嚴しき母よと思ひしこともありしかど、今となりてかく人にほめらるゝは、偏に繼母の情によれり」。といひけり。

われ聞きて、始めて、予が幼き頃の作文をほめられざりし事の、いとも有難かりしを思ひ合せぬ。（雲萍雜志）

二八　海上日記

水上瀧太郎[1]

日本に通じる無線電信は今晩[2]でおしまひだと、電信局の人

(一) 本名阿部章藏。實業家、文學者。
(二) 大正元年十月三日。

が注意に來てくれた。「カウカイブジ」。と云ふやうなのが、幾つも幾つも繰返されて居るのである。自分も父母に、何か一言いひ送らうと思つたが無事といふ以外に何も無く、唯無事だけでは、あまり物足りな過ぎるので、手帳を出して、あれこれと近頃の自作の歌の中から適當なのを選ばうとした。景樹*の流れを汲んで和歌を詠まれる母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて、旅にでも出た時とか、又は母自身が家を留守にした時には、必ず吾等に對して子を思ふ親の心を三十一文字に籠めて書越されるのであつた。見やう見まねで、兄も姉も、幼いときから歌を詠習ひ、母から送られた時には返しをするといふ風であつた。自分も何時

*香川景樹。

かそれに倣つて、旅好きの身の旅先から強ひても母の好きさうな古風な歌を詠出でては書送るのを習とした。

丁度此の夏も、自分は拙い歌を、拙い文字に認めた驛路の繪葉書の、如何許り母を慰めるか、又如何に母が誇りかに、人々の前に、それを示すかを想像しながら九州路の旅に日を暮した。

それこれを考へ合せて、幾度も〳〵、短いありふれた句を手帳に書いては消し、消しては書きした後で、

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリ

チチハハノイヘコヒシトオモヘド

として、恰も晩餐の時刻に我が家に着く樣に、無線電信掛の人に頼込んだ。

晩餐時にこれが着くと、父はなんだつまらないと云ふ樣な顏をして見られるに違ひない。しかし、その心中の嬉しさは隱さうとしても隱し切れず、見ない樣な風で居ながら、電報の歌を諳んじられるに違ひ無い。母はもうたまらなくなつて、目顏に涙を滲ませながら、幾度も〳〵口吟んだ後、妹にも弟にも、さては女中達にまでも讀み聞かせられるに違ひ無い。明日からは、彼の家の夫人、その家の奥さん達に逢ふ度毎に、我が子の歌を脣に上せられるに違ひ無い。自分にはよくそれが見えるのであつた。（海上日記）

名は常規。文學者。俳句の大家。明治三十五年歿す。

二九　箱根路

正*岡子規

箱根路へかゝれば何となく行脚の心の中うれしく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白雲光あり。

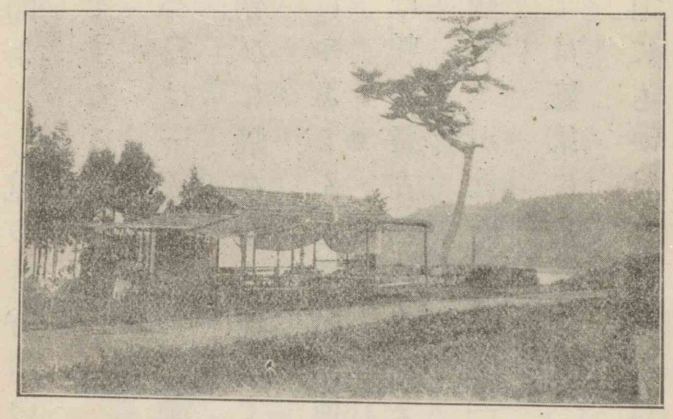
湯本に辿り着けば、一人の男袖をひかへて、「いざ給へ、好き宿まゐらせん。」といふ。引かるゝまゝに行けばいとむさくろしき家なり。前日來の病も全くは癒えぬに、此の旅亭に一夜の寒氣を受けんは氣遣はしく、やゝ躊躇したるが、まゝよ、これこそ風流の眞面目、行脚の眞面目なれと、そのまゝこゝに宿りぬ。

つぎの日まだき起き出でつ。板屋根の上の滴る許りに濡ひたるは昨夜の雲のやどりにやあらん。よもすがら雨と聞きしも覓の音、谷川の響なりしものをと、はや山深き心地ぞすなる。

今日は一天晴渡りて、瀧の水朝日にきらめくに、鶺鴒の小岩傳ひに飛び歩くは、逃ぐるにやあらん、此方へとしるべするにやあらんと、草鞋の運び自ら輕らかに、箱根街道登り行けば、鶯の聲左右にかしまし。

病みつかれたる身の一足のぼりては一息つき、一坂のぼりては巖端に尻を休む。駕籠舁の頻りに駕籠をすゝむるを耳にもかけず行けば、はや二子山鼻先に近し。谷に臨めるかた許りなる茶屋に腰掛くれば、枯皺みたる老婆の挨拶何

となくものさびて、面白し　打見やれば、千仞の谷間より木を負うて上り來る樵夫二人三人ものもえ言はで汗を滴らすさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足を茶屋にやすむるに、それぞれにいたはる老婆のなさけ、一椀の澁茶よりも猶濃し。名物ありやと問へば力餅といふものありとて、大きなる餅の燒きたるを二つ三つ盃に盛り來る。



箱根舊道

力餅の力をかりて上ること一里餘、杉樅の大木道を夾み、元

箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙境に入りたる如し。

幾重の嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みて、上り着きたる山の頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心ひろさよ。餘りの絶景に恍惚としてえも立ちやらず、木の株に坐してつくづくと見れば、山更に靜かにして、風吹かねども、冷氣冬の如く足もとよりのぼりて身にしみわたるこゝちす。波の上を飛びかふ鵜鴿は忽ち來り忽ち去る。秋風に吹き惱まされて、力なく、水にすれつあがりつ、胡蝶のひら〳〵と舞ひいでたる、箱根のいたゞきとも知らでやあらん。遙かの空に、白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、

こゝよりも猶三千仞はあるべしと思はるゝに、更に其の影を深く沈めて、さゞ波にちゞめよせられたるさま、またなくをかし。

箱根

箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近き魚一尾あり。

蘆湖

主人誇りかに、「こは湖水の産にして、こゝの名物なり。」といふ。名を赤腹といふとぞ。

これより山を下るに、見渡す限り皆薄なり。金紋先箱の行列整々として、鳥毛片鎌など威勢よく振りたてゝ行きかひし街道の繁昌も、あはれ、物の本にのみ殘りて、草刈る童のゆき通ふ小道一筋を除きて、外は、草の生ひ出でぬ處もなく、纔かに行列のおもかげを薄の穗にとゞめたり。

槍立てゝ通る人なし、花芒。

三〇　山村

相馬御風

一

新潟縣岩船郡村上町に注ぐ三面川の水源地方に、三面村といふのがある。平家の殘黨が落人となつて今に至つたものであるとの傳説もあるが、それは信じられない。

(一)自分は岩船郡視學を勤めてゐた頃、明治三十三年十月の初、

(一)文學者。名は昌治。

(二)作者ではない。

岩崩村に行つた序、收稅官と共に案内者につれられてその村に行つた。

二

早朝まだ薄暗いうちに、自分達一行は出發した。村を出外れると間もなく山路にかゝつた。木の根や岩角傳ひに草や木の踏みしだかれて居る處を、さがし〳〵辿つて行くのであつた。藤蔓に傳はつて高い崖を上つたり下つたりする處も幾箇處もあつた。里程は岩崩から七里半だといふ事であつたが、其の七里半といふのが、高い山を二つ越える上り道と降り道とだけなので、その困難さといつたら、とても名狀出來ないものであつた。其の證據には、其の二つの山を越えるだけに、十一時間も掛つた。しかも、其の十一時間の旅の間に出遇つた人と云つては、ほんの一人きりしか無かつた。それは三面村のものだといふことであつたが、初め、遠くから見た時は大きな猿の樣に見えた。時々妙な聲を出して叫びながら、樹の枝を傳ふやうにして山を下りて來る其の男の樣子は、全く猿としか見えなかつたのである。案内者の話によれば、あゝして山の中を歩く時には、彼等は必ずあのやうな聲で叫びつゞけるのださうであつた。それは鳥や獸が友を呼びかはすやうに、山に居る者同士があゝして呼合つては淋しさを紛したり、力を添合つたりするのだと、案内者は更に註を加へた。

二つ目の山を下ると其處がつまり三面部落の在る盆地であつた。

村は人家二十九戸と寺一宇しか無いといふ事であつたが、見る限の廣い盆地は悉く耕されてゐるやうに見えた。盆地の中間に、かなり大きな川が流れて居た。川を越えた向ふの山際に三面の人家が見えた。

一行が二つ目の山を下り切つた時に、二人の案内者が聲を揃へて、「おういー」と叫んだ。すると川縁の渡し小屋から人影が現れて、こちらの聲に應じて叫ぶのが微かに聞えた。案内者は云つた。

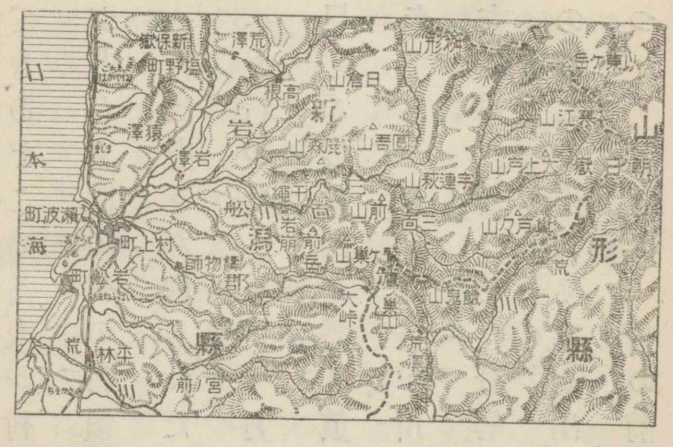
「あれは此方への返事と、それから村々への知らせで御座ります。誰か人が來たとなると、よし此方から呼ばらなくても、あそこの番人が村へ知らせるので御座ります。それが昔から此の村の習慣でしてね。」

一行は處々刈取られた田の間を通つて川端の渡しある處へと行つた。まだ十月の半ばにならなかつたが、その邊は見える限の山が悉く眞赤に紅葉して居り、平地は一面に黄色であつた。一行が川端まで行つた時には、渡舟がもう此方の岸に着いて自分等を待つて居た。見ると舟はアイヌの間にしか見る事が出來ないといはれて居た獨木舟であつた。渡守は一行の前に平伏して、

「ようこそお出でくださいました。」と云つた。

其の樣子や言葉遣ひが、何となく芝居で見る昔の渡守のやうであつた。

大きな樹の幹をくりぬいて拵へたごろごろした獨木舟が、自分達を乘せて對岸へ運んだ。それが濟んだ時、村から五十恰好の羽織・袴を着けた男が先頭に立つて、十人あまりの者が自分達を迎へるために、態、其の渡場までやつて來た。



其の羽織・袴（無論粗末な地質で拵へた、古びた、舊式な格好のもの）を着けた男が、即ち此の部落全體の總本家の主人小池大炊之助といふ者であつた。彼は自分達の近くへ來ると、うや〳〵しく頭を下げて、矢張り昔風な切口上で歡迎の意を長々と述べた。後に付き隨つた十人程の村人は、それについて默つて頭を下げた。

三

やがて自分達一行は、其の村人たちに案内せられて、愈、三面の本村へと乘込んだ。村の樣子は、一見他の山村と異つた所は無かつた。草葺の低い小屋が飛び〳〵に連つて居た。背戸に雞が飼つてある家もあつた。獵に使ふために飼つて居るらしい純日本種の犬が、處々で自分達に向つて吠え掛つたりした。小屋の前の地べたに坐つて、着物の繕ひを

してゐるきたならしい老婆も二三人見えた。軒下に名の知れない眞赤な草花の咲いてゐる家もあつた。さういふ間を抜けて一行は、型ばかりの門のある家へ案内された。それが小池の家であつた。その家もさう目立つて大きくは無かつたが、建て方が少し他の家々とは違つて居た。家の中は殆ど眞暗であつた。とつつきの茶の間には、一間四方もある大きな爐が切つてあつて、其の中で大きな木の根が二つ燃え燻つて居て、上から釣るした大きな鐵瓶の湯がたぎつてゐた。自分達が其の茶の間の上り段に腰掛け、草鞋の紐を解いて居ると、短い袂のついた着物を着て、細い帶を腰に巻きつけた十六七の娘が、盥を持つて來、やがて手

桶に湯を汲んで來て其の中へ注ぎ込んで、足を洗へと云つた。所が盥は竹の輪を掛けた普通の桶らしい形をしてゐたが、手桶でも柄杓でも凡て木を抉つて造つた、かの獨木舟と同種類の物であつた。

やがて自分等(案内者を除く外の)は主人大炊之助の案内で奥の間へ請じられた。しかし其の奥の間にさへも疊は敷いてなかつた。何處も一樣に板の間の上に蓆が敷詰めてあるそれだけであつた。それぱかりでなく、村中に蒲團といふものが無く、誰でも一樣に、藁を積んだ中へもぐり込んで寢るといふことであつた。それでも自分等をもてなすために、火鉢も出され、茶も出され、風呂まで立てられた。風

呂は、巨大な岩に大きな穴を掘つて、其の中へ釜で沸かした湯を汲込んだものに過ぎなかつた。特に自分の爲に貉の毛皮の敷物まで用意された。

主人大炊之助は絶えず自分等の前に畏つて、色々と話の相手をした。併し彼は自分等の世界のことなどには、まるで無關係だと云ふ風に見えた。収税吏が租税の事について話をしても、自分が教育の事について話をしても、一向そんな事には無關心であつた。其の村の租税は彼一人の手で纒められて、收税吏の手へ渡るのであつたが、それとても彼には唯それを出さなければ、自分達の身の上に何か知ら怖しい事がやつて來るからといふやうな漠然とした心得から、殆ど機械的に行つてゐることに過ぎないやうに見えた。そんな風であるから彼等の眼に映じた自分等は、幼い子供等の眼に、兵士や巡査が此の世で一番えらい者のやうに映じてゐるそれと大差ないやうに思はれた。が、妙な事には、彼は宿帳のやうな帳面を一册持つてゐて、それに自分等の署名を求めた。あけて見ると、明治十二年に山縣某といふ人が訪ねたのを初として、二十六人の人名が記してあつた。その二十六人のうちでも、半數以上は收税吏らしかつた。

四

その晩は、薄暗い行燈の灯影で自分等は、自分等の爲にとて特別に整へられた夕食をたべ、自分等の爲に特別に用意さ

れた寢床の中へ早くもぐり込んで寢た。

翌朝早く門口で盛に吹鳴らす法螺貝の音で眼をさました。少々氣味惡く思つたので、起きるとすぐにあの貝は何の爲に吹くのだと主人に訊ねた。主人はあれは用事があつて、人足を呼ぶ時に鳴らすのだと答へた。いかにも、そんな問答をしてゐるうちに、もう一人の百姓男がやつて來て、上り段の處の土間にしやがんで用命を聞いた。

「大儀だのう。」斯う主人はゆつたりと答へた。そして「町の方から且那樣が御座らしたで、お前は山へ行つて芋を掘つて來い。」と命じた。男は「はい、畏りやした。」といつて出て行つた。やがて第二の男が來た。主人は今度は其の男に、川へ

行つてやまめでも捕つて來いと命じた。つゞいて第三・第四の男が來たが、何れも型の如くそれ〴〵の用事を言ひつかつて出て行つた。其の何れも自分等をもてなす爲の仕事なので、聞いて居る自分等は何となく濟まないやうな氣がした。

朝食を濟ましてから、自分だけは職務上、村に唯一つある寺子屋を視察に行くことにして大炊之助の案内で宿を出た。寺子屋は村を出ばづれた山際の小高い處に建てられた禪寺であつた。其の建物は寺と云ふよりも、寧ろ大きな辻堂のやうであつた。本堂は無論粗末ではあるが、それでも禪宗の式に倣つて造られてゐた。それにほんの一室しか無

い庫裡が附屬して居て、そこに坊さんと寺子屋の師匠とを兼ねた一人の四十格好の男が住んでゐた。此の男は髪の毛や髯を蓬々と伸して、手織麻の妙な仕立の着物を着た、牛のやうな無口なのそり〳〵した男であつた。村中の子供は男女の別なく、一人殘らず此の男から讀み書きと算術とを習ふのであつた。彼はもと信州松本の者であつたが、十三年前に此處に斯ういふ異風な村があるといふ事を聞いて、突然好奇心を起してやつて來た。そして小池の家に厄介になつて十日居り二十日居りする中に、何となく此の村が離れ難くなり、つい其の儘斯うして此の村の者となる事になつたとのこと。

三面村の敎育の狀況はどうかと聞かれる際に、自分の答ふべき事は、たゞ「あの村では、今日でも寺子屋制度を持續してゐる。師匠は村中で一人しか無いが、村中の子供は男女の別無く貧富の論なく、悉く一樣の敎育を授けられてゐる。」といふだけで十分であつた。

五

自分が其の寺小屋に居た時、其の後ろの山の上に當つて、突然大勢の人が聲を揃へて何か叫ぶのが聞えた。自分は驚いて立上りながら、「あれは何だ。」と訊ねた。大炊之助はそれに答へて、「あれは今日山で熊が捕れたので、獵に出てゐる者共が其の事を山の神樣に御告げ申して御禮をいつて居る

ので御座ります。」と云つて、彼は熊獵の話をした。

秋の收穫が濟むと、村中の屈强な男共は群を成して熊獵に出かける。そして冬期間を山の中で暮す。山へ登る七日前から寺に籠つて齋戒沐浴する。それは身の汚で山の神樣の怒を買はぬためだ。そして、山へ登つたが最後、どんな事があつても普通な言葉で物をいはない。凡て「山言葉」といふ一種特別な言葉で用を辨ずる。それは一つは普通な言葉で無闇な事を話して山を汚さない爲であり、一つは山に居る間は出來るだけ口數を少くして居るためだ。熊は主として陷穽で獲る。獲れた熊は凡て山で屠つて肉は獵師共の食物にして、皮と膽だけは里へ持つて歸る。併し始

めて獲れた熊だけは、持つて歸つて肉を村中の者で食ふ。今の叫び聲はその初獵の熊を持つて歸つた賑はひだ。總じて熊獵では皮と膽だけは獲つた者の所得になるが、肉は村中の者の共有とする定めになつてゐるこの事。

さうした話のうちで、特に自分の注意を惹いた事は、始めて獲つた熊は誰が獲つたのであつても、其の肉を村中の者が集つて食ふといふ事であつたが、わけても其の事が第一の日に於ては、村中の六歳から十五歳までの子供を集めて行はれるといふ事が、自分には云ひ知れぬ床しさを感じさせた。其の晩は自分達も熊の御馳走をされた。

翌朝、自分等は、その山奥の村に別を告げた。自分等の出發

別れの時は情味のある言葉で送ってほしい

間際にも、法螺貝が吹鳴らされた。さうしてその貝の音につれて大勢の人が村端れの渡場まで見送つてくれた。

「また來てくれなさいな。」

斯ういふ情味の籠つた言葉が、一同の口から洩れた。自分達はもう自分達が役人である事を忘れ果てゝ、彼等に懷かしさの充ちた別れの言葉を殘した。（田園春秋）

六訂 女子國語讀本卷一 終

大正十四年二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

六訂 女子國語讀本 全十册

初版	明治三十五年三月十日	大正正十正日
再版	明治三十五年一月十三日	大正正十正日
三版	明治三十六年十二月十日	大正正十正日
四版	明治三十七年十一月十七日	大正正十正日
五版	明治三十九年十二月九日	大正正十正日
六版	明治四十年四月八日	大正正十正日
七版	明治四十年四月七日	大正正十正日
八版	明治四十年四月十日	大正正十正日
九版	大正元年十一月十一日	大正正十正日
十版	大正二年十一月十一日	大正正十正日
一十版	大正三年十一月十一日	大正正十正日
二十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
三十版	大正四年十一月七日	大正正十正日
四十版	大正四年十一月八日	大正正十正日
五十版	大正四年十一月十日	大正正十正日
六十版	大正四年十二月九日	大正正十正日
七十版	大正四年十一月一日	大正正十正日
八十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
九十版	大正四年十二月三日	大正正十正日
一十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
二十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
三十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
四十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
五十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
六十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
七十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
八十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
九十版	大正四年十二月二日	大正正十正日
刷印版	大正四年十二月二日	大正正十正日
發行版	大正四年十二月二日	大正正十正日

定價
卷一、二、五、六、七、八、九、十 各金參拾七錢
卷三、四 各金參拾九錢

大正臨時五十年度定價
卷一、二、五、六、七、八、九、十 各金六十三錢
卷三、四 各金六十六錢

著作者 吉田彌平
同 小島政吉
同 篠田利英
同 岡田正美

印刷兼發行者 東京市麹町區內幸町一丁目六番地 金港堂書籍株式會社
代表者 原安三郎
印刷所 東京市麹町區飯田町三丁目十番地 獅子吼堂印刷所

發賣所 東京市麹町區內幸町一丁目六番地 金港堂書籍株式會社
賣捌所 各府縣特約販賣所

不許複製